

連続公開シンポジウム

廿一世紀の東方学

第3回

東方学の再構築

京都大学人文科学研究所

2002年（平成14年）3月

連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」

第3回「東方学の再構築」

主催：京都大学人文科学研究所

2002年（平成14年）3月16日（土）
京大会館 101室

目 次

第3回「東方学の再構築」開催にさいして	Ⅲ-1
プログラム	Ⅲ-2
開 会 の 辞	人文科学研究所所長 阪上 孝 …… Ⅲ-3
報告1 教養教育と中国学	愛宕 元 …… Ⅲ-5
	コメント：宇佐美文理
報告2 芸能と文献	金 文京 …… Ⅲ-14
	コメント：中務哲郎
報告3 海洋史から見た東方学	濱下武志 …… Ⅲ-21
	コメント：岩井茂樹
報告4 東方のサイエンスの復権	武田時昌 …… Ⅲ-30
	コメント：吾妻重二
総 合 討 論	司会：麥谷邦夫 …… Ⅲ-39

(題字 栗山正進)

第3回 「東方学の再構築」開催にさいして

日本の東方学は今どのような課題を抱え、世界の中でどのような位置を占めているのか。そして「21世紀の東方学」は、どのような方向を目指していけば良いのか。これらの問題に関して、第1回シンポジウム「東方学のフロンティア」、第2回シンポジウム「東方学と国際協力」では、様々な角度から問題が提起された。最終回となる今回のシンポジウムでは、これまでの議論を十分に踏まえつつ、社会環境や知的枠組みの大転換の時代にあつて、これからの東方学を研究、教育の両面にわたってどのように再構築していくべきかに焦点を絞って議論を深めることにしたい。

プログラム

連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」

第3回 「東方学の再構築」

主催 京都大学人文科学研究所

日時 3月16日(土)13時~16時場所 京大会館 101室

開会の辞 阪上 孝(人文科学研究所所長)

司 会 麥谷邦夫(人文科学研究所教授)

パネリスト

愛宕 元(総合人間学部教授)

「教養教育と中国学」

金 文京(人文科学研究所教授)

「芸能と文献」

濱下武志(東南アジア研究センター教授)

「海域史から見た東方学」

武田時昌(人文科学研究所教授)

「東方のサイエンスの復権」

コメンテーター

宇佐美文理(人文科学研究所助教授)

中務哲郎(文学研究科教授)

岩井茂樹(人文科学研究所教授)

吾妻重二(関西大学教授)

開 会 の 辞

人文科学研究所所長 阪上 孝

司会（麥谷邦夫）時間になりましたので、これから「21世紀の東方学」の第3回目のシンポジウム、「東方学の再構築」を始めたいと思います。

本日は、週末ということでもありますけれども、多数おいでいただきましてどうもありがとうございます。

まず、開催に先立ちまして、人文科学研究所所長の阪上孝教授から一言ごあいさつを申し上げます。お願いします。

阪上 本日は年度末の大変お忙しい時期にもかかわらず、「東方学の再構築」にかんするシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。お礼申し上げます。本日のシンポジウムは、昨年9月から行なって参りました連続シンポジウム「21世紀の東方学」の最終回、締め括りにあたります。

東方学の出発点は17世紀後半のヨーロッパに求めることができます。このころから、イエズス会士たちがもたらした大量の情報の刺激を受けて、東洋がヨーロッパとは異なった文化、価値観の支配する地域として関心を集め、そのようなものとして認識の対象になり始めるからです。18世紀に入って啓蒙の時代を迎えますと、モンテスキュー、ヴォルテール、フランソワ・ケネーといった知識人たちが競って中国の政治制度や社会の考察に取り組みます。モンテスキューは中国の政体を端的に専制政体としてとらえ、厳しい眼差しを向けましたのたいして、ヴォルテールやケネーは中国の政体を礼賛しました。ヴォルテールは、中国の皇帝は表面的には専制君主だが、人民にたいする愛情によって道徳的に拘束されているから暴君にはなりえず、中国の政体は啓蒙的専制とよぶのが適切だと述べます。またケネーは中国の政治制度が自然法と学問にもとづくとして、そこから彼の政治の理想である合法的専制の概念を作り上げました。さまざまな中国論が展開された啓蒙の時代は、東方学の誕生の時代だと言ってよいでしょう。

しかし19世紀に入って産業革命を経るなかで、啓蒙の時代に見られた中国像の多様性は薄れ、ヨーロッパの東洋観は「進んだ西洋」対「後れた東洋」という枠組みに収斂してゆきます。この時代の進歩史観がこのような傾向を加速します。さらにこの図式はヨーロッ



だけでなく、アジアの知識人をも捉えることとなります。日本においても中国においても、「進んだ西洋」の科学と技術をいかに学び導入するかが重大な問題になったことは、あらためて申し上げるまでもないでしょう。こうして東洋対西洋という図式は世界を認識するための支配的な枠組みになったのですが、この図式は西洋の東洋支配を正当化する強力なイデオロギーでもあり、批判の対象になりました。竹内好は西洋対東洋という対抗図式が近代日本の解決困難なアポリアであったと指摘しましたし、サイードが、オリエンタリズムにたいして厳しい批判を加えていることも周知のところでしょう。現時点で、「東方学の再構築」を提唱しようとするれば、東洋対西洋という図式の批判的検討をさらに深める必要があるでしょう。

東方学の再構築を考えようとするれば、東洋観の歴史的変遷と伝統を批判的に検討することが必要だと思います。でしょう。東方学を形作る伝統のうちには、骨化し形骸になった要素とこの学問に生命を与える生き生きとした要素があるでしょう。東方学を再構築するには、この二つの要素を注意深く区別し、前者を捨て後者を採ることが不可欠でしょう。連続シンポジウムの締め括りになる今日の議論がその機会になることを願っております。最後になりましたが、今日ご講演いただく先生がたに心よりお礼を申し上げて、簡単ではありますが、私のご挨拶といたします。(拍手)

教養教育と中国学

京都大学総合人間学部教授 愛宕 元

司会 どうもありがとうございました。

それでは、シンポジウムに入りたいと思います。本日司会をさせていただきますのは、人文科学研究所の麥谷でございます。

このシンポジウム、過去2回すでに行われていまして、第1回目は「東方学のフロンティア」という題で、4人のパネラーの方のお話を伺い、第2回目は「東方学と国際協力」ということで、やはり4人のパネラーの方のお話を伺いました。

本日は3回目の「東方学の再構築」ということで、やはり4人のパネラーの方にお話をいただきたいと思います。会場の時間が限られておりますので、最初にお断わりしておきますが、パネラーの方の発言は20分、コメンテーターの方は5分ということをお願いしたいと思います。

まず最初に、本学の総合人間学部教授の愛宕元先生に「教養教育と中国学」という題でお話いただきます。愛宕先生は、京大の文学部東洋史学科を卒業された後、人文研の助手をしばらくなさってから、当時の教養部の方へ転出されまして、以後長期にわたって教養教育の現場で中国史を教えておられます。ご専門は中国の中世史及び近世史でして、特に官僚制度あるいは社会的階層、それから都市、城市の構造や交通情報網などの歴史的变化を中心に研究をなさっておられます。最近では、いわゆる一般的な文献資料だけではなくて、石刻資料などを活用された研究で知られております。ご著書には『唐代地域社会史研究』『中国の城郭都市』などがございます。それではよろしくお願ひします。

愛宕 ただいまご紹介にあずかりました総合人間学部の愛宕と申します。

私に与えられましたテーマというのは、今お話がございましたように、「教養教育と中国学」というふうなことで、私自身長らく教養部、そして現在一応学部にはなっておりますけれども、いわゆる1、2回生ですね、全学の理系、文系を含めた1、2回生に対する教養教育をずっと担当してまいりましたので、こういうテーマだからというので私に白羽の矢が立



ったんだろうと思います。実は現在、京都大学における、これは日本全国共通することだろうと思いますけれども、教養教育というものが非常に問題になっております。我が京

大でも例外に漏れませんで、さまざまな面で問題点が指摘されております。その点を含めて、特にそれを中国学というものに引きつけまして、少しお話しさせていただこうかと思っております。その意味で、サブタイトルに「現状と展望」とつけましたのは、あまり展望は実はないんです。絶望とは言いませんが、その寸前ぐらいの状況で、あまり展望はございませんけれども、その辺の現在どういう状況になっているかというようなことを少しお聞きいただければと思います。

簡単なレジュメですが、A4で3枚用意いたしましたので、大体それに沿ってお話しさせていただきます。

まず最初は、教養部という組織の問題ですが、これは余り東洋学とは直接関係ございませんけれども、要するに私が身を置いております旧教養部、現在の総合人間学部というところのいわゆる推移、これは皆さん方、あえて言うまでもないかも知れませんが、昭和24年、これが新制の大学制度が発足した年です。この段階で旧三高のキャンパス内に分校が設置されます。これがいわゆる教養部の前身です。旧三高のキャンパス、ちょうど東一条通の本部キャンパス、時計台のあるキャンパスが本部キャンパスですが、これの南側ですね。現在も三高時代の建物がごく一部残っております。A号館、正面入って真正面にございます3階建ての建物でございますが、これはこの夏に壊されますので、それをもって三高時代以来のものはほとんどなくなります。

そして、25年5月に宇治分校が開校いたします。これはなぜかと申しますと、旧三高時代のキャンパス、キャンパスは広うございますが、建物が三高時代の学生を収容し得るだけのキャパシティしかない。そこへ1,000人を超える、一番下のところに昭和24年の入学人数が書いてございますが、1度に1,500人の学生が入ってくるわけです。とてもじゃないけれども、講義する講義室等々が圧倒的に足らなくなるというので、宇治の旧陸軍の火薬廠に、1回生はそちらで最初の教育を受けるという、そのために宇治に分校が開校される。ですから、入りたての1回生、京大の1回生というのは、最初の1年間はすべて宇治で教育を受けたわけです。もちろん私はその経験はございませんけれども。ですから、当初、この時期のしばらくの間は学生諸君、1回生の学生諸君、特に地方から来る学生というのはどこかに下宿しなくてはならぬですね。大体多くが中書島界隈に下宿をした。そして、こんなのもいいことなんです、中書島界隈というのは旧赤線地帯ですね。それが赤線が皆だめになってしまって、そういうところが皆下宿屋に変わって、というふうなことを先輩からいろいろ聞かされております。

そして、昭和30年によろやく教養部という名称が正式に認められます。といっても、これはあくまでも学内措置です。京都大学内部での措置です。

そして36年によろやく旧三高キャンパス、つまり現在の総合人間学部のキャンパスに少しずつ建物が整備せられてきて、数千人の学生を収容し得るだけのキャパシティが出てくる。それで宇治分校を廃止する。これまでは、したがって二重構造ですね、学生も教師も、特に教師の側は大変だったようです。先生方が吉田の方と宇治の方を週に何度も行き来な

さる。大変なそういう不便さが解消せられたのは36年です。この時点でようやく学生は、すべてこちらの方で1年生から教育を受ける。私は昭和38年の入学でしたので、宇治の経験は幸か不幸かございません。

そして38年、ちょうど私が入った年なんですけど、こんなこと言うと年が知れますけれども、このときに今まで学内措置であった教養部という呼称が文部省に正式に認可されます。京大、九大、阪大、名大、この4大学です。東大はちょっと別格ですが。

そして非常に飛びますけれども、平成3年4月に、この間いわゆる教養部、我々は学部を持たない、つまり固有の学生を持たない組織なわけですね。すべて1、2回生、他学部の学生をお預かりして、1、2回生の間教育をするだけ。固有の学生を持たない。そのためにさまざまな研究、その他さまざまな面で既存の学部、9学部との間に格差が厳然としてあったわけで、それを何とかして埋めたい。そのためには学部化する以外にはない。そのさまざまな検討をこの間ずっとやってまいりました。

そしてようやくそれが平成3年4月の段階で、まずその学部化の前段階として、それまでの教養部というのはスタッフが、教官の数が助手を含めまして大体240人もいるんですね。到底そんな学部はつくれないわけです。そのために、できるだけスリム化するという形で、一部の人たちを別に切り離して、いわゆる独立研究科として人間・環境学研究科というものを設置することが認められました。この独立研究科というのは、これはいわゆる学部を持たない大学院のことです。普通、例えば文学部ですと、上に文学研究科、今は逆ですけども、文学研究科があって学部が下にある。他学部もすべてそうですが、ところが我々の場合はそうではなくて、学部を持たずに、つまり院生だけを教育指導するような大学院、それが独立研究科です。そして、これが京都大学における最初の独立研究科ですが、以後雨後のタケノコのように、現在次々にできております。

そして、そういう形で学部の教官定員を少し切り崩すといいますが、スリム化した段階で、平成4年10月に教養部から総合人間学部へと改組、つまりようやく学部としての一本立ちができたわけです。ただし、この段階で全学の下におけるいわゆる合意というのは、従来からのいわゆる教養教育というものの、つまり全学共通教育の実施責任部局というオリゲーションをつけられたまま現在に至っているというわけです。

そして、平成5年4月に第1期生130名の入学を迎え、現在に至っているというわけです。

さて、これは直接東洋学とは関係ございませんが、いわゆる教養部、そして現在の総合人間学部における東洋学には歴代どういう先生方がいらっしやったかということ、その下に挙げておきましたが、これを見ていただいておりますように、文学部、あるいは人文科学研究所に次から次へと引き抜かれていくという状況がよくおわかりになるだろうと思います。そして、羽田明先生、これは東洋史。西田太一郎先生、これは中国哲学、教養部では東洋社会思想史、思想史の講義をなさっておりました。それから吉川忠夫さん、これは東洋史。堀川哲男さん、これも東洋史。荒牧典俊さん、これはインド学、インド仏教

学，インド哲学のご専門。そして私が東洋史。それから西脇常記さん，これがやはり中国哲学史，哲学の方ですね。それから松浦茂君，これがやはり東洋史。こういうスタッフ。そして，私以下がいわゆる現任ということで，ちなみに私の着任年次を見ていただきますとおわかりのように，昭和49年，1974年の8月です。ですから，私は全学共通教養教育に携わって四半世紀以上になるという，こういうことがおわかりいただけるかと思います。

それから1行あけて，その下に何人かの先生方をお挙げしておきましたが，これが中国語教育です。教養部で1，2回生相手に語学として，初習の外国語としての中国語を教育なさった先生方，ですから，これは田中謙二先生，清水茂先生，尾崎雄二郎先生，都留春雄先生，それからここにいらっしゃる高田時雄さん，それから現任の赤松君，阿辻君，道坂君。すべてご出身はいずれも文学部の中国文学の方々です。いわゆる京都大学において東洋学の教育に携わっている過去の，そして現在のスタッフというのはこういうメンバーです。

次に，東洋学関係の学科目の変遷と書きましたが，これがある意味で非常に時代性を映しているといえますか，もともと新制大学になりまして，つまり分校が発足した段階における東洋学関係の授業科目というのは，東洋史学，東洋社会思想史，それから中国文学，漢文学，中国語，それから中国語のⅡ，この中国語のⅡというのは中級，つまり初級をクリアした大体2回生以上ぐらいが受講するようなものです。

それが昭和45年に少し変わっております。特に東洋史学に新たにゼミナールというものが加わっております。この45年，これはいわゆる教養部全体の授業科目の変遷を一覧にしてお見せすると，一層よくおわかりになるかと思えますけれども，この45年にいわゆるゼミというものが新たに登場する。これが一つの特徴。これはなぜかといえますと，これはご記憶の方もあろうかと思えますけれども，この前の年あるいはその2年ぐらい前から，全国の大学を吹き荒れた大学闘争ですね。あるいは大学紛争，これですね。特にあのときには学生たちの全学共通科目，とりわけ大人数を相手に，一方的に教師が難しい話をやりっ放しにするということに対するかなり強い批判がありました。つまり，そういう批判を受けて，もう少しきめの細かい，つまり教官と学生のある意味ではパーソナルな人間関係とまではいかなくても，そういう一方的な講義ではなくて，もう少し意思の疎通が図れるような授業形態はなかろうかということで，ゼミナールというものが登場してまいります。大体10人前後ですね，1ゼミ当たり。これがこういう形で登場してくるのが45年のかなり大幅な授業科目変更です。

そして，平成5年度のもの，これは総合人間学部，つまり学部化した段階で，我々がこれまではある意味では全学共通科目だけを担当しておればよかったのが，学部生対象の専門教育も同時にやらなければならなくなりました。さらには，その前年に発足しました独立研究科，人間・環境学研究科の大学院教育をも同時にやらなければならなくなってきました。途端に授業負担数がすごく増えたわけです。単純計算しますと3倍に増えたことになりま

る工夫することによって、学部との共通あるいは学部教育と大学院教育との共通等々の苦心の末の、ある意味では小細工なんですけれども、それで大きくまた授業科目名が変更になっております。そして、この段階で、特に中国語担当の教官たちというのは、従来はもっぱら語学教育だけに専念してくださっていたわけなんですけれども、そうはいかなくなってきたわけです。つまり、学部生を同時に担当してもらわなければならないというわけで、中国文学がまた復活したわけです。いわゆる文学畑の東洋学の講義を新設してもらわざるを得なくなった。その中国文字文化論及び古典講読等々が新たに登場しているのはそういう背景でございます。

さて、次に4番目ですが、ここに京大の入学人数の推移を書いておりますが、我々はこのだけの学生を相手に、しかるべき講義をずっとしてきているわけです。もちろん、例えば私個人の授業にこのすべてが出ていたわけでは決してありませんけれども、とにかくこれまでは9学部、現在は10学部ですね。そこに学部名をずっと上に書いておきましたが、文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、薬学部、工学部、農学部、そして総合人間学部、これが10学部です。新制が発足当初はたかだか1,500人余り、とはいっても旧三高時代の、旧制高校のそれに比べますと数倍ですが、それが少しずつ定員が増えていきますが、特に注目していただきたいのは昭和40年、1965年です。大体5年刻みで昭和の段階は定員増を書いておりますけれども、35年から40年の間に一挙に500人以上定員増です。そしてそれは工学部のところで極めて顕著です。工学部の学生定員が大幅にこの時期増える。いわゆる高度成長時代と呼ばれる時代、この時期に理工系の学生定員を文部省がどんどん増やしたわけです。これがある意味では大学の雰囲気そのものをかなり変えることになったように私自身は感じておりますが、そして平成4年、この表では平成4年の時期が2,900人で、一番ピークになっておりますが、これはその少し前あたりからのいわゆる学生というか、大学適齢年齢の子供たちの数が非常に増えた時期です。いわゆる団塊の世代になりますか。昭和22年前後生まれぐらいの方々が親御さんの子供たちが、大体18ぐらいになるのがこの時期です。

ですから、このときには私学はもちろんですけれども、国立大学は軒並みに臨時定員増という措置で、学生がそれぞれ増えました。それは各学部の昭和60年と平成4年の定員の差を比べていただくと一目瞭然だと思いますが、これだけ臨時定員として定員が増えたわけです。このときには当然、各学部単位であれば、工学部は別格にしまして、各学部の場合はせいぜい20人とか15人ですよ。ところが、トータルいたしますと何百人です。つまりそれが一挙に教養部になだれ込んでくるわけです。つまり、我々が従来よりも数割多い学生を相手に全学教育科目なるものを担当せざるを得なくなった。ただし、この際には20人の学生定員が増えるに比例しまして、教官1人の純粹の増員が認められたんです。ですから、教官数も特に我々教養部ではこの時期は増えたんです。

ところがその後、平成12年のところを見ていただきますと、かなり減っています。つまりその適齢期が済んでまた少しずつ受験生の数が減ってくると、当然臨時定員というのは

少しずつ削られていき、また大体もとどおりの各学部の学生定員になって、現在というか、これはもう2年前の統計ですけども、約2,800人ぐらいです。そうしますと、その間20人の定員数が減ると、やはり我々の部局から1人の教官の首を切らなきゃならなくなったわけです。もちろん実際生首を切るわけにはいきませんで、定年退官でおやめになる方のあとを埋めないとか、あるいは他部局あるいは他大学に転出された方のあとを補充しないとかいう形で、四苦八苦して定員削減の処置をしまいいりましたけれども、そういうさまざまな政治的、社会的な動きというものが、ある意味では縮図のような形で教養部には反映している。そのたびごとに我々は四苦八苦してきたというのが現状でございます。

ここまでは余り東洋学と関係ございませんが、次の2枚目のところで、もう時間が大幅にオーバーしておりますんですが、特に現状でございますけれども、これだけ現在2,800人近く1学年、そして2回生まで合わせますと6,000人近い学生が我々のキャンパス、つまり南側のキャンパスにあふれているわけです。

6,000人です。もちろん6,000人であふれ返るのは4月、連休前ぐらいまでですけども、そのうちの6割5分が理系の学生です。特に多いのが工学部の学生、そして理系の学生というのはいわゆる人文社会系の学問、研究というものに関して、最近とみに関心が薄いというか、無関心層が非常に多いんです。にもかかわらず、理系の学部では人文社会系の全学共通科目を一定程度の単位数を必須科目として課しているわけです。ですから、学生たちは全く関心ない、聞きたくもない、くそおもしろくもないにもかかわらず、単位はそろえなければならない。

つまり、こういう学生を相手にいかに、特に東洋学、私の場合ですと中国史ですが、中国史の話はいかに興味を持たして話を聞かせるか。これは年々至難のわざになってきております。そして、大体高等学校まで、それなりに世界史、日本史という歴史の勉強はしてきているにもかかわらず、大学でやる本格的な歴史というのは、やっぱり違うわけです。つまり、大体受験生というか1回生が歴史離れが非常に激しいのは、一つには受験のために、何年何月だれが何をしたというようなことを無理やりに頭の中にたたき込むような受験教育ばかりを受けてきているわけです。それでは歴史なんてのはおもしろくありませんね。

一方、テレビゲーム、パソコンのゲーム等々で例えば「三国志」等々のゲームがあるようです。そういうことに関しては異常に詳しいです。だから、三国時代をたまたまある年の私なんかの講義のテーマにしますと、途端に受講生は増えます。それからあるいはシルクロードの話、一つかかわりのあるような話をテーマに持ってきますと、やはりこれもまた非常にふえます。ところが、それ以外の極めてオーソドックスな中国史をテーマにすると、これはもう激減いたしますね。つまり学生の志向といいますか、中国の歴史の見方というか、好みの持ち方というものがあまりにもはっきりし過ぎている。だから、それをなんとかもう少し万遍なく、しかもオーソドキシカルな中国の歴史展開というものをこちらとしては理解させたいんだけど、なかなかそれが通じないというまどろっこしさみたいな

ものを、ここ最近特に強く感じる次第です。

それともう一つは、理系の学部からのさまざまな、ある意味では我々は圧力と感じておりますけれども、つまり、はっきり言えば、もっとレベルを下げた授業をやってくれということです。そんなレベルの高い、高校ぽっと出の学生にそんな難しい話をしてもらっても彼らにはわからん。ですからもっとわかりやすい話をしてやってくれという、陰に陽にそういうものがこのところずっと続いております。そして実際、そういう注文に、ある意味では耐え切れない状況です。ですから、悪くすればまさに、授業の質を意図的に下げなければならないという時代が近々やってくる可能性が少なくないと、私は感じております。

しかし、私個人としては絶対にそれは承服できない、したがって面従腹背ですね、私自身は授業の質を下げるつもりはさらさらございません。現に理系の学生であってもきっちりフォローする学生がおります。数は少のうございますけれども。ですから、今ちょうど小学校で学級崩壊等々がいろいろうさく言われておりますよね。ある意味では同じような状況です。つまり、学生のどのレベルに合わせるのかということです。私は一番高いレベルに合わすつもり、つもりというか、そういう形でやってきましたし、これからも変えるつもりはございません。そういうのが現状。

それともう一つ、東方学関係で、中国語の受講者数が数年来むちゃくちゃに増えているということです。それは3枚目のところにその細かい数字を挙げておきましたが、下半分の2回生の外国語の履修状況、真ん中あたりに中国語がございます。そこの特に中国語の初級の工学部のところをごらんになってください。2回生で工学部の場合、264名が登録しております。

264名、つまり2回生で初級をとっているわけです。つまりこのほとんどは1回生で単位を落とした連中です。

といいますのは、数年前に工学部がいわゆる中国語の履修を卒業単位にカウントすることを認めたくて。そうしますと、工学部の学生というのは一番語学嫌いでも有名なんですが、中国語が一番簡単だろうという、非常に安易なんです。同じ漢字やと。ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語よりもはるかに簡単やろうという、こういう極めて大きな、これはとんでもない錯覚ですが、ところが実際言語系統は全然違います。しかも文字だって、現在の中国語は簡体字といわれる極めて画数を少なくした独特の文字を使っております。途端にギブアップしちゃうんです。皆落としちゃう。ところが、現在中国語の専任教官というのは3名しかおりません。そこに書きましたとおり、ほとんど非常勤の方々に頼り切っているという現状。これまた非常に大きな東洋学の一般教育におけるひずみがそこに生じております。

そして、もう時間がオーバーしましたので、最後に、やっぱり学生の関心を引きつけてやるということ、できるだけ、もちろん「三国志」とか「敦煌」だけではありませんで、おもしろい話はいくらでもあるんです。だからそういう学生のどこをくすぐれば関心を持

つかという、ある種のそういうテクニック、私なんか古ダヌキですんで、大体それがわかります。そういう講義をやるとそれなり、特に今の中国ですね、現在の中国というのは非常に大きく変貌しつつあります。私も毎年、今年も20日からまたしばらく行ってまいりますけれども、とにかく今の中国はものすごい変貌ぶり、特に沿海部の発展というのは目を疑うばかり、大体日本の高度成長期の5年分を1年でやっています。ところが、内陸部に入りますと、依然として古いものが残っているし、人々の生活も依然として極めてレベルの低い生活を強いられている。その辺の話ですね。実際毎年私自身が見た状況と、そして歴史遺跡のさまざまな現状というふうなものを絡めて、ときにはスライドを見せる等々、こういう形で話をしますと、これは非常に関心を持ちます。ですから、歴史というのは単なる過去の事象ではなくて、やはり現在につながっているという認識といますか、こういう思いを学生にもう少し注ぎ込んでやらないかなということ、現在私自身が考えている次第です。

その2枚目の一番下のところに挙げておきましたのは、これは自画自賛で汗が出る感じがいたしますが、これは今年の2月の私の定期試験を受験した経済学部の中国人留学生、1回生の感想文です。別に感想を書けとは言ってませんが、何人かがこういう形で答案の後に感想を書くんですが、こういう感想を書いてくれますと、これは教師として本当にありがたい。うれし涙が出るような。ただ、こういうふうに感じてくれる学生というのはごく一握りだというのが現状でございます。

どうも長々ご清聴ありがとうございました。(拍手)

コ メ ン ト

人文科学研究所助教授 宇佐美文理

司会 どうもありがとうございました。大変興味深いお話、もっと聞きたいところなんです、時間の関係もありますので、それでは本研究所助教授の宇佐美文理さんの方からコメントをお願いいたします。

宇佐美 宇佐美でございます。簡単に3点ほどお話ししたいと思います。

実は、私もこの研究所に参ります前は、信州大学というところにいたのですが、そこでは教養部というところに最初配属をされまして、ということで、この席に私もいるのではないかと思うのですけれども、実は教養部というものは、教養部は要らないというふうに文部省というところから言われまして、解体させられました。そして、英語を勉強しているのに繊維学部だとか、フランス語の先生なのに農学部だとかいう形で分属をさせられたわけです。

ところが、それから十数年たって、先月だと思いますが、中教審、いわゆる中央教育審

議会というところが教養というものをもう一回考え直して、教養の実施に責任を持てる部局、部局とは書いてありませんが、そういう組織みたいなものをしっかりやりなさいということをもたいきなり言われるようなことになりました。教養の問題というのはこれからの大学を考える上で非常に重要な要素であるということは恐らく明らかで、そんな中で先生のお話を伺って、私も考えなければいけないなと思った次第です。

それから2点目はレベルの問題ですけれども、理系の先生方はそういうことをおっしゃるといってお話でしたが、こんなことを言うと叱られるかもしれませんが、やっぱり理系の学生に対しても、レベルを下げた教養の例えば東洋史などをやるというのは、かえって理系の学生にとっても不幸なことだというふうに僕は思います。ですから、先生もおっしゃったように、レベルは決して下げないでやるべきだと思いました。

それから3点目は、今プリントの1枚目のメンバーといいますか、これを見て、ものすごいなと思って拝見しているんですけども、信州大学の場合ですと、この表の上のグループと下のグループとありますが、上のグループには、教養部が解体した時点では1名、下のグループは2名という、そういう状態でした。ですから、学生数の問題とかがありますが、単純に言ってメンバーが倍といいますか、スタッフが倍いっちゃうわけで、非常に充実した教養教育のできるメンバーではないかと、信州大学にいた目から見るとそういうふうに見えるわけです。したがって、先生、最初に絶望だというようなことをおっしゃいましたけれども、そんなことをおっしゃらないで、これからも頑張っていたきたいというのはちょっと何か変な感じですけども、私もいろいろ考えて、皆さん全体でといいますか、大学全体で考えていかなければいけないということを思った次第です。

以上です。

芸能と文献

人文科学研究所教授 金文京

司会 ありがとうございます。

それでは引き続きまして、本研究所教授の金文京さんに「芸能と文献」という題でお話しいただきます。金さんは京大の文学部の中国文学科を卒業なさいます、多分そのときからずっとだと思えますけれども、中国のいわゆる正統的な文学として高く評価されてきた詩文ではない、しかしながら明代以降になると、文学の主流を占めるようになってきた小説あるいは戯曲の研究を中心になさってこられました。また、中国のみならず朝鮮から日本へという非常に広い範囲、視野での研究を展開されておられます。著書には『三国志演義の世界』あるいは『広東木魚書目録』といったようなものがございます。

それでは、よろしく願います。

金 ただいまご紹介いただきました金でございます。「東方学の再構築」という大変難しいテーマでして、再構築というからには今ある東洋学がもうだめで、これを破壊してもう一度構築しなければいけないのか、それとももうすでに東方学というのは崩壊しているので再構築するというのか、その辺から議論を始めなければいけないわけで、これはもう大変な話です。それで私はいろいろ迷いまして、余り抽象的な大きな話をしては仕方ありませんので、私の研究している分野から一つ例をあげて、この東方学の再構築というテーマに少しでも寄与してみたいと思います。



それで、早速お話を始めさせていただきますが、皆さん、中国の古代の聖人に舜という人がいるというのはご存じだろうと思いますが、この人は親孝行だということです。後世まで有名です。親孝行というか、この親がひどいんですね。これは『孟子』や『史記』に見えている大変有名な話で、お父さんが舜を殺そうとして倉庫の修理をしるというので、屋根に上らせて下から火をつける。ひどい親がいたもんですけれども、そうすると、舜は傘をパラシュートみたいに使ってひゅっとおりてきて無事だった。

父親は、じゃあ次は必ず殺してやろうというんで、井戸をさらえと言う。井戸に舜が入ると、上から土を入れて生き埋めにしてやろうという手に出るわけですが、舜はちゃんとそれもわかっていて、あらかじめわきに出る道をつくっておいて、そこからひょいに出て

きて助かった。今で言う児童虐待ですけども、そういうひどい親であるにもかかわらず大変親孝行だったということで、これは近世に至るまで、いわゆる「二十四孝」という親孝行な人を集めた代表的な話がありますが、そのトップがこの舜であります。

舜は古代の聖人でもありますし、ずっと後世まで話は同じなんですありますが、ところが、敦煌から発見された「変文」という唐代の一種の民間文学の中に、やはりこの舜を扱いました「舜子変」というものがあります。これを見ますと、今お話しした有名な『孟子』や『史記』にある2つの話もちゃんとあるんですが、その前にもう一つ話があるんです。それをお手元のプリントに、左側に原文を活字にしたものと、右側にその写本の写真を入れておきました。これには2つ写本があるんですが、最初にある話というのはどういうものかといいますと、まず第1の写本で、舜のお父さんが、これは継子いじめの話になっていて、継母がいるんですが、父親が商売で旅行に行っている間に、継母が舜に向かって、もうすぐお父さんが帰ってくるけれども、ごちそうするものがない。ちょうど庭に桃がなっているので、お前その桃を取ってこいというので、舜を桃の木に登らせるわけです。その後が変なんですけど、継母はわざわざ自分の髪をといて、かんざしで自分の足を刺す。それで継母がけがをして、木の上にいる舜に、足をけがしたんで見てくれというふうに言うので、舜が木からおりてきたというところでなぜか第1の写本がそこで切れてるんです。第2の写本の続きのところは、継母が足をけがして寝ているところへ舜のお父さんが帰ってきて、お前どうしたんだ、病気にでもなったのかと言うと、継母は実はあんたの息子の舜が私に変な気を起こして、原文は、ブタや犬のような心をとっていますが、私の髪が黒くて顔が白い、つまり別嬪なのを見て畜生の心を起こした、こういうふうにするんです。それでお父さんが怒って、舜を折檻したという、非常におかしな話が敦煌の「舜子変」にあります。これは、一種の色仕掛けといえると思うんですけども、舜はそれにのらなかつたのですから、潔白なわけですが、しかし、聖人舜に対してこういう話があるということ自体大変けしからん話で、この敦煌変文以外には、この話は少なくとも現在知られる範囲では全く見えません。

ところが、1992年ですから、今からもう10年前になりますが、中国の南の広西壮族自治区、壮族という少数民族が住んでいるところですが、その省都の南寧というところで、私が専門にやっています中国演劇、特に中国語では儼戯といいますが、吉田神社の追儼の儼という字を書きます、要するに仮面劇なんですけれども、それに関する学会がありまして、それに行ったところ、壮族の仮面劇というのを実演で、せっかく外国から来たというので見せてくれたんです。その中に「舜児」という舜を主人公にした芝居がありまして、それがなんと驚くべきことに、今お話しした敦煌変文と似てるんです。プリントの下の方にそれを活字に起こしたものと、右側に、これは私が写真で撮った、ちょっと文面がはっきりしませんけれども、脚本をあげておきました。この芝居の話は敦煌変文とはちょっと違って、母親が舜を桃の木に登らせた後で自分で竹のくぎを木の下にまくんです。それで舜が飛びおりたら足をけがするようにとたくらむのですが、舜はそれをちゃんと知ってい

て、反対側にぴょんと飛びおりてしまう。それを見てお母さんがあわてて木の下に駆けていって、自分がそのくぎを踏んで、けがをしてしまったというので、細部は違うんですが、これは明らかに類話であると言えるでしょう。プリントを見ていただくとわかりますが、一見漢字ですけれども、意味の通じないところがたくさんあります。実はこの脚本は少数民族語である壮語を書くためにつくられた漢字のような文字で書いてあるので、意味は中国語では読み取れないんですが、大体以上のようなことが書いてあります。

そのときにビデオを撮りましたので、これからそのビデオをちょっとお見せしたいと思います。

これはもともと壮族の伝統的な演芸ですから、当然農村なんかで行われてるんですけど、これは学会のためにやったので、舞台上上演されていて、まあ一種のやらせです。ではお願いします。

(ビデオ上映)

これは舜のお父さんです。これから旅行に出かけるぞというふうに言っているんだと思います。今左側にちょっと見えたのは倉庫なんで、ちゃんと後の2つの話もこの芝居にはあるんですね。仮面をあみだにかぶっているのは、多分歌を歌いやすいようにこういうふうになっている。舞台背景なんかもありますから、かなり現代化しています。これが継母なんです。後ろの方に、ちょっと見えにくいですが、木があります。今お父さんがいない間に息子の舜をいじめようというふうに今言っているところなんだと思います。私にもわからないので想像なんですけど、たぶんそう言っているのだと思います。

舜にいらっしゃいと言うから舜が、「お母さんどうしたの、何か用事ですか」というふうに言ってるんだと思います。ここで木に登って桃を取りなさいというふうに言っているわけです。全部歌でやってるんですけども、メロディが非常に単純で、同じメロディを繰り返し繰り返しやるわけです。これは非常に初期段階の芝居の形態です。いま木に登りました。すると継母が竹のくぎを下にまくんです。今くぎをまいているところです。けがさせてやろうということなんですけど、これは舜がちゃんと分かっていて、逆の方にぴょんと飛びおります。すると継母が駆け寄ってくぎを踏んでしまい、「あやや」というので足をけがする。この後は『孟子』や『史記』に見えるのと同じで、倉庫に登らせるのと井戸に入るという話がありますが、それは省略させていただきます。どうもありがとうございました。

(ビデオ上映終了)

この話は、一つは唐代の、唐末か五代だと思えますけども、敦煌から出た変文にある。もう一つは、20世紀のはるか南の広西のしかも漢民族でない壮族の芝居にある。それ以外

にはないわけです。これは一体どういうことなのかということは興味深い問題で、この両者の間に、これは偶然なのか、あるいはなにかの関係があるのかということが当然問題になるわけですが、それについてはきょうのテーマとは関係ありませんのでお話ししないことにします。ご興味がおありの方は、不十分ですが、私が書いた文章もありますので(「敦煌本舜子至孝変文と広西壮族師公戲舜児」『言語文化研究所紀要』26号 1994慶應義塾大学)、それを見ていただければと思います。きょう私が申し上げたいことは、この話から東方学の再構築という今回のシンポジウムのテーマについて、どういふことを私が感じたかということです。

今、私はこれを見て大変びっくりしたと申しましたが、それは敦煌の変文と壮族の芝居が同じ話であったからです。ところが、もう一つ私は驚いたことがあるんですね。というのは、この学会に参加した人、多分100人ぐらいいたと思うんですが、外国から来た人は10人ぐらいで、全員一緒にこれを見たんですが、この芝居を見て驚いたのは私1人だけで、ほかの人は全然驚かなかったんです。私は、ほかの人が全然驚かないということに驚いたわけです。(笑)これは別に私が自慢で言っているわけではなくて、なんでほかの人は驚かなかったかということ、ほかの人は『敦煌変文集』を読んだことがなかったからなんです。ですから当然、敦煌の話は知らないわけですから、壮族にこんな変なものがあるなと思っただけで、別に驚かなかったわけなんです。

じゃあなんでほかの人は『敦煌変文集』を読んでなかったかということ、中国で大体こういう会議に参加する人というのは、演劇関係者、たとえば地方の劇団で脚本を書いている人、あるいは文化局でこういう演劇関係の行政に携わっている人であって、大学で「敦煌変文」なんかを読んで研究しているような人は、全然こういう会議には来ないんです。そこへたまたま私が場違いというか、一応「敦煌変文」を読んだことのあるような者が行ったので、これを見ることができて、それで驚いたということなわけです。

中国ではこういう実際の、実地の調査をする学問は、これは私の分野に限ってかもしれませんが、そういう実地調査をする人と文献の研究をする人というのがかなりはっきり分かれていて、双方の情報の交換があまりないんです。中国ではこの10年来、非常に目覚ましい研究の進展があって、我々外国の研究者はそういう中で、中国の学者に対抗してというか、その中で自分たちの存在価値を見いだせるような研究をするのは大変な時代にだんだんなってきましたが、やはり中国の研究状況というものをよく見れば、まだまだ我々の中ですらやっつけられる余地というものはかなりあるのではないかというふうに思うわけです。

そのためには、これは月並みですけれども、やはり学際的研究ということが大事です。違う分野のことを自分でもよく知って、違う分野の人と協力しているんな方面に興味を持つということがやはり必要で、中国はまだまだそういう面では、あまり異なる分野の交流というものは進んでいないというふうに、少なくとも私の分野ではそうだと思います。

じゃあ省みて、我々の日本の学会はどうかということ、これも私の分野だけかもしれませ

んが、学際、学際ということが言われて久しくなりますけれども、実際は学際研究というのは、言うはやすく行うはかたしということで、そんなに目覚ましく行われているわけではないのです。これはほかの分野の人と一緒にやって、その分野にかなり関心を持っていかなければいけないわけですから、なかなか難しいことではあるんですが、そういう努力を一層して行って、新しい方向、新しい見方から従来の文献あるいはこういう実地調査で得たものを再検討して行って、新しい事実を見い出していかなければ、今後研究を、中国の非常に積極的な研究に太刀打ちしてやっていくのは難しいだろうというふうに思います。

これに関連して、これも私の分野に限ったことかもしれませんが、こういう実地調査というのは、中国では実は最近非常に積極的に行われていて、それこそブルドーザー式にはぱっとやられてるんですね。ですから、中国に対抗して我々も中国と同じような立場でやるということは非常に難しくなっておりまして、私も1週間ぐらい中国の農村に行って現地調査というのをやったことがあるんですけども、これは1人の力ではとてもできない。また、中国に匹敵するようなそういう組織をつくってやるような力も、あるいはお金もないので、やはり中国側と協力し、中国側から情報をもろうということになります。そして、これはたまたま私が気がついたケースですけども、そういう中国側が、あるいはほかの国の学者が気づかないようなところを気づくような、そういうふうに我々の研究体制なり方法なりを変えていく必要があるのではないかというふうに思うんです。

それからもう一つは、方法とともに視点の問題があります。今ごらんになった敦煌の「舜子変」の話は、『孟子』や『史記』にくらべて、話が1つ多かったわけですが、この「舜子変」の話が『孟子』や『史記』よりも古く、もともと舜の話はこういうふうにこれがあったんだというようなことを言うほど私は大胆ではありませんが、しかし、その問題をちょっとどけておいて考えてみると、こういう継子いじめ、あるいはこれは継母と継子の一種の性的な関係を暗示するような話なわけですが、これは中国では非常に珍しい孤立した話ですけども、世界的に見れば、いわゆる説話や民話の中には、こういう話はかなりたくさんあるんです。その辺りのことは、後で中務先生にちょっとコメントをしていただきたいと思います。

また「敦煌変文」や壮族の芝居では、舜がうける試練が3つあることになっているわけですが、大体こういう昔話とか説話とかでは、似たような試練が3つあるという話が大変多いわけで、そういう意味からも、これは世界的な広がり、普遍性を持っているというふうに言えると思います。

これまでの中国に関する研究では、中国は非常に特殊な国で、西洋あるいは日本とは違う文明であるという視点が大変強かったように、私は思います。ですから、いわゆる中国学、東方学と西洋学あるいは日本学が対話をする余地というものも限りがあったように思います。そのため日本学と西洋学との間で非常に活発な交流が行われているほどには、中国学と日本学なり中国学と西洋学の間では、活発な対話が行われていないという状況があります。

もちろん中国という国は古代から非常に独特な文明を持っているわけですが、しかし、それは儒教的な教養を持ったいわゆる士大夫と呼ばれる知識人の文化についてはたしかにそうかもしれませんが、そうでない、例えば今お見せしたような民間の文化に関しては、我々が思っているよりはるかに世界の他の地域との共通性は多いので、この方面では中国の文化というものはそんなに特殊なものではないというふうに思います。ですから、今後はもう少しそういう中国が世界の中でほかの地域と共通する部分を見ていく、そういう見方というのが、21世紀のこれからの中国のあり方とも関係しますけれども、そういう方向で視点を変えて、そっちの方向にももう少し研究を移してやっていくということが新しい東洋学、新しい中国学のためには、より多くの発見をすることができますし、それから中国自身、あるいは我々の研究にとっても、より大きな貢献、将来につながる研究になるのではないかというふうに思っております。

以上で、私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

コ メ ン ト

京都大学文学研究科教授 中務哲郎

司会 どうもありがとうございました。非常に具体的な例を提示されて、文献と芸能との間、あるいはもっと一般的に東方学の研究の方法と視点ということについてお話をいただきました。

それでは、本学文学研究科教授の中務先生の方からコメントをいただきたいと思います。

中務 ただいま大変おもしろいお話を伺いまして、おまけに珍しいビデオまで見せていただきましたが、実はきょうのお誘いに先立って、金先生から今ちょっとおっしゃった、別に書き物の形にされたものも僕は拝見しましたので、きょうのビデオも期待をもって見せていただきました。金先生は、唐代につくられた「舜子変」の話が、現代の辺境の民族の中で実際に芸能として行われているということに大変驚いたというふうにおっしゃいましたけれども、僕はこのお話を伺って、僕自身は西洋、ギリシャを中心とした説話文学なんかやっていますので、僕は僕で非常に驚いたんです。

それは、これと非常によく似た話が紀元前13世紀のエジプトにすでにあるんですね。これも有名な話ですけども、2人兄弟の話でして、お兄さんが野良仕事に出ている間に、弟が兄嫁に色仕掛けされるんです。ところが、それを断ったもんですから、兄嫁から兄さんに讒言されるという、そういう話が一番古い。これは有名な旧約聖書創世記のポテパルの妻がヨセフを誘惑するという話につながっていきますし、それから紀元前8世紀のホメロスの叙事詩イリアスにもこの話が出てくるんです。非常に普遍的な話。

ギリシャ神話の中にも実にたくさんこのような話がありまして、2つタイプがあります。

色仕掛けで継子に迫って、断られて逆恨みするという話と、それからもともと継子が憎くてやっつけようとする話です。1つの例としては、きょう倉庫の屋根に上げて下から火をつけるという話がありましたけれども、ギリシャの継子いじめの話でも、焼けたかまの上に、パン焼きがまか何かだと思っんですが、乗せてやっつけようとする、そういう話があって、あるいはその伝播の過程で変形したけれども、同じようなモチーフじゃないかという気もするんですね。

中国に継子いじめの話は余りないとおっしゃいましたけれども、漢訳仏典なんかには随分たくさんあるんじゃないかと思うんです、インド起源の話は。岩本裕先生は、アショカ王伝に出てくる継母のクナラ王子への色仕掛け失敗の話が西の方に行くと、西の方の「ローマ七賢人物語」の元になった、つまり岩本先生なんかはこれがインド起源でそれがペルシャの方に行ったというふうにおっしゃいますけれども、ペルシャ起源という説もあります。その「ローマ七賢人物語」の枠物語というのがまた今のと同じような話なんです。若い継母が王子に色仕掛けをしてお父さんに讒言するという話ですけれども、今この話を伺っていて、舜というのはもちろん非常に古い実在というか、神話的な帝王ですけれども、有名人ですけれども、これにまつわる話は本当に世界普遍的な話で、有名人に仮託された民間の話、継子いじめの話じゃないかと思っています。ついでながら、金先生も3つの意地悪があったのではないかとおっしゃいましたが、昔話の3段階の法則から言って、僕も初めは3つの意地悪が揃っていたと思います。

それが非常に古くからあったのか、あるいは10世紀ころのペルシャに起こった「七賢人物語」が西と東へ広まって、当時非常に有名な話でありますので、それがこの「敦煌変文」のころに中国へ行ったんじゃないかというような気もするんですけど、僕の場合は全く文献しか扱ってませんので、よくわかりません（『史記』から「敦煌変文」へという流れの他に、中世説話から「敦煌変文」という線をも考えるわけです）。その点金先生は、変文というような非常に珍しいものもお読みになりますし、それから中国の現実の、現代の民間芸能なんかも研究されますので、そこからさらに世界的な視野に立った研究をなさるのには、中国学の方というのは本当に最適の方じゃないかと思うんです。

今ちょっと申しましたエジプトの話、ギリシャの話、それからペルシャの話、こういったものはすべて芸能とは結びついていませんし、今は文献の形でしかないんですけども、今伺っておりますと、中国ではいまだに伝承された芸能の形でも生きています。もちろん中国は文の国ですから、文献もある。両面から比較研究を進めていけるところというのは、恐らく現代では中国しかないんじゃないかと思うんです。日本ではそういう事態が失われて30年というふうに言われていますので、これから中国学の方に説話研究といいますか、を進めていただければ、一人東洋学という枠にとどまらずに、世界的な規模での説話学というものが新たに起こるのではないかというふうに、僕なんかは感じて期待している次第です。

海洋史から見た東方学

東南アジア研究センター教授 濱下武志

司会 どうもありがとうございました。

それでは引き続きまして、濱下武志先生に「海域史から見た東方学」という題でお話し
願いたいと思います。濱下先生は東京大学の東洋史学科を出られまして、その後一橋大学
を経て、東京大学東洋文化研究所へお移りになって、96年から98年の間は所長をされてお
られました。

この間、89年には、清末の海関、いわゆる税関と関税その他の財政と開港の諸条件を研
究された『中国近代経済史研究』を、次いで90年には、国際経済の中における中国をテー
マとする『近代中国の国際的契機』をお書きになったほか、『朝貢システムと近代アジア』
という、これは97年に出版された本ですけれども、そこへつながります朝貢システム論で
あるとか海洋秩序論といった研究を進められております。

最近では中国、沖縄、日本、それから東南アジア方面を含む地域をグローバルに、かつ
全体的な視野からとらえようという研究に取り組んでおられまして、多くの著書、論文が
ございます。また、一昨年に、岩波書店から全6冊で出版されました「シリーズ 海のア
ジア」の企画編集の中心を担われるなど、いわゆる海域史といわれる分野の第一人者で
ございます。現在は、京大の東南アジア研究センターの教授をされると同時に、東京大学の
東洋文化研究所の教授も兼任されておられます。本日は、そういう大変ご多忙な中でお話
を伺う機会を得られました。

それでは、よろしくお願ひします。

濱下 どうもありがとうございます。東方学を再構築するという、とても野心的な
試みといいいましょか、あるいはとても時宜にかなった問題提起と受けとめて
おりますけれども、歴史学という面から見て、あるいは歴史研究という面から
見て、東方学をどのように今後考えていくのかという視点で、少し申し上げます。
海域史という分野はこれまでも一つの研究領域であったわけですが、考え
られるこれからの東方学の中で、海域史
研究というものをどのように考えるか、海域史を一つの歴史を考える時間と空間として捉



えるという意味で、海域史から見た東方学というテーマで少し考えてみたいと思います。

最近、歴史学あるいは歴史研究が隣接の分野から、人類学ですとか社会学ですとか、特に歴史研究が社会史研究という領域を非常に強調してきた経緯もありまして、隣接分野からの歴史学への影響、あるいは歴史学の隣接分野からの受けとめというものが大変大きくなってきたと思います。したがって、それまで歴史学の中にはなかった理論とかあまり論ぜられなかった分析方法などが問題になってきたように思います。例えば、歴史学という歴史は、私が見る場合には向こうにある歴史であったんですが、例えば人類学とか社会学は、私の歴史とか、あなたの歴史とか、そういう形で歴史学を非常にこちらに引きつけたわけです。それから、社会心理学などとの関係で、アイデンティティーということも議論されるようになりました。歴史学の中にアイデンティティーが入ってきますと、今度は資料と同時代人の目とそれを分析する私たちの目ということが、より複雑に見直されるという面も出てきたように思います。

それは今後いろいろ考えていかなくはいけない問題ですけども、現在歴史研究が動きつつあると思う問題の中に、これから東方学をどう考えるかという課題とも重なっているということでもあります。個人的な感想ですが、今中国は、もちろん中国は中国だという議論がある、あるいは日本は日本だという議論は前からあるわけですが、中国の知識人は脱亜というのでしょうか、脱亜を一生懸命進めているように思います。それから、アメリカの知識人は脱欧を一生懸命進めているように思います。では日本はどのようになるのか。脱米になるのか、あるいは脱欧米になるのか、あるいはもう一度アジアということを考えるのか、課題は多いと思いますけれども、中国知識人の動きが顕著に見られるように思います。その中で東方学もグローバル化した東方学という課題が出てくると思います。アメリカでのグローバル・ヒストリー・スタディーズという議論、中国における地縁政治、地政論という議論、これは歴史研究でも照らし出されているわけですが、それから日本における問題という3方向から考えたいと思っております。

私は「中国」として一般的に言う場合は一応地理的な中国として考えています。中国というときに、文化的な中国とか、あるいは主権的な中国とか政治的な中国とか、いろいろな中国というものがあると思います。差し当たり地理的な、ユーラシア大陸の東という地域ですけども、そういう中国史の中では海域史というものはどのように扱われてきたのか少し見てみたいと思います。これは疆域史と言われているわけですけども、边疆と海疆というふうに疆域史が分類されています。边疆とは西北中国で、藩属として統治される地域です。モンゴルとかチベットです。それから朝貢を行う部分をやはり边疆と位置づけていると思います。

それから、海疆の範囲は東南沿海から台湾までにかけてですが、島嶼あるいは海域という部分の議論がなされ、边疆と海疆の両者から疆域史という領域が成立している。そしてそれは政策の問題から言いますと、边防と海防とかあるいは民族の問題、今で言いますと少数民族の問題ですが、そこから近代の国境問題などが出てくることとなります。これら

の問題が、中心と周辺とか、あるいは中央と地方とか、南北関係とか、それから朝貢と化外とか、などの統治理念の政治的、経済的、文化的な影響のちょうど境界に当たる領域で考えられてきたと思います。これからもこういう分類は続けられると思いますけれども、またこれだけではない組み合わせも、時代に応じて、私たちは考えなければいけないと思っております。

次に申し上げたいことは、これまでの海域史研究に固有のテーマは何であったらうかということです。時代を追って、あるいは視点を異にししながら、また分野を異にししながら、非常に多くの議論がなされてきたところであると同時に、またその評価の分かれ方もなかなか多様で、研究の展開に伴って変わってきた。例えば倭寇研究などは前期倭寇、後期倭寇と言われますが、現在の海域史研究からもう一度倭寇の問題を考えるとどうなるかという課題もありますので、比較的新しい課題の組み合わせが今後もなされなければならない部分だと思えます。

それから、後に少しスライドを見ていただきながら問題にしてみたいと思いますが、海域史研究あるいは海域研究という、これまでは陸をもとにさまざまな歴史の課題が組み立てられてきたわけですが、海域という場、あるいはそういう海域の歴史という時間を中心に据えると、どんな議論が成り立つだろうかという課題を考えたいと思います。

また、「海の思想」、「儒教と海」というテーマは、儒家の海に関する議論です。沖縄の伊波普猷が著した沖縄の儒家の海の議論を見ようと思います。そこでは実は海を議論せずに、「三鳥問答」という、ハヤブサとカラスとサギが出てきまして、村と田と畑の重要性をそれぞれが言うだけです。沖縄は海とは無関係でないと思えますけれども、沖縄の儒家の議論には、海ということは一つも出てこない。

ということは、儒教が大陸文化の一つであり、陸という特徴の枠で考えるとき、では海はどのように位置づけられるか、あるいは海を見る思想がどのようにあるかということです。そのことはその後に関国というものをつくる時に、中に収斂していく求心力をつける必要があった。これは統治ということと関係したと思えますが、儒教の政治社会的な役割がかかわると同時に、儒教の伝播以前はどうだろうかという疑問も湧いてきます。琉球はやはり海という場を持ってさまざまに行き来していたのではないか。琉球的な海なども見ることによってより海の議論が広がるのではないかと考えているところです。以上、海洋史に関わる私の関心を申し上げましたが、以下に項目ごとに少し詳しく見てみたいと思います。

<グローバル・ヒストリー・スタディーズと「地縁政治論」>

今、歴史研究でいくつか、これは日本の方々も議論なさっていますが、グローバル・ヒストリー・スタディーズがアメリカの脱欧化と関係していると思えます。これまでアメリカ合衆国には歴史がないということで見えてきましたし、またそのようにアメリカ自らも議論してきたわけですが、アメリカ大陸の歴史という形で、スペイン時代の銀の世界的な流通、

それから南アメリカ大陸のいわゆる物産がほかの大陸や、世界に伝播するという歴史も含めて、アメリカ大陸の世界史的な役割という文脈にアメリカ合衆国もつなげようとする議論です。これはある意味では現在のアメリカのヘゲモニーを正当化するといえますが、それを歴史的にさかのぼろうという面も見られるわけです。ただ、歴史研究の中で王国斌 (R. Bin Wong) さんとかケン・ポメランツ (Kenneth Pomeranz) さんなどは、産業革命以前のユーラシア大陸の東と西について構造が違うという形で、必ずしも遅れた、あるいは進んだということではなく、労働集約的な東アジアと資本集約的な西ヨーロッパという形で、違うモデルを問題にしようとしています。この点もグローバル・ヒストリー・スタディーズの議論の一つの特徴でもあると思いますし、そういう視点でのアジアあるいは東アジアの位置づけ直しという議論であります。

他方、現在の中国が自らを表現したり議論したりするときに、地縁政治という形で地政論を強く展開しているというところに、私は非常に興味を持っております。事実、その中で海国中国という形で、文化的なあるいは政治的な影響を持っていたことを、海洋国土ですとか、あるいは海国中国という表現で、いわばもう一段広く海洋に自らを強調するということが大きな特徴であります。そこには近隣との関係あるいは内部での、これまでのナショナリズムとの関係などでいろいろ考えなければならない興味深い問題が出てきているように思います。

そして、それらの問題を日本の歴史的な視野からどのように考えるか、例えばステファン・タナカ (Stefan Tanaka) という二世の研究者が、日本のオリент化すなわち、ジャパニーズ・オリентという博士論文をアメリカで出版しました。それまでの漢学が、ヨーロッパの歴史論という枠組み、方法を経由して東洋史という形でもう一度アジアを見る、視点を切りかえることになりました。この議論は、例えばその後のアジア史の議論の中で、歴史的な国学、漢学、洋学という3派の鼎立関係を、現在もう一度再検討するという課題を提示しています。以上の問題は、これが結論であるということではなく、現在議論されている視点を、これからのより総合的な東方学の議論にどのように結びつけていけるだろうか、という課題であります。

〈海洋研究 疆域朝貢論から地理学へ〉

海域史がこれまで周縁として考えられてきたことをもう少し朝貢関係に関する議論の本体に取り込む必要があると思います。例えば朝貢・冊封という関係は、後ほどスライドでご説明させていただきますけれども、海域をどう利用するかということ抜きには存在しなかったと思います。私は朝貢という問題を考えるに当たって、次第に海の方に朝貢を議論する場を移しつつあるような気持ちであります。

次に、これまでの海域史研究の中で、特に、魏源の『海国図志』について多くの研究があります。近代世界を国家の視点からとらえようとしたときに、それを海国という形で海と結びつけて世界を配置しようとしたわけです。これは一種の中国のジレンマと同時にダ

イナミズムの表現かもしれませんが、背景的に北にでき上がる王権、皇帝権力というものと、むしろ外につながっていく海という区分がある中で、それを例えば中国と表現します。ただ、国民という国と民の2つの字が結びつく歴史がなかったように、海と国も歴史的にはなかなか結びつかなかったと思われます。そこを結びつけることによって、近代の中国の知識人が世界というものを知ろうとしたという意味なり動機づけは、とても重要ではないかと思われます。

それとも関係しますが、国家と帝国といいましょうか、あるいは国家とヨーロッパのアジアにおける植民地問題をつなぐ議論の中で、海をどのように経営するかということが非常に重要な対象となります。単に交通、交易だけではなく、より戦略的な海ということが見直されてきたと思います。

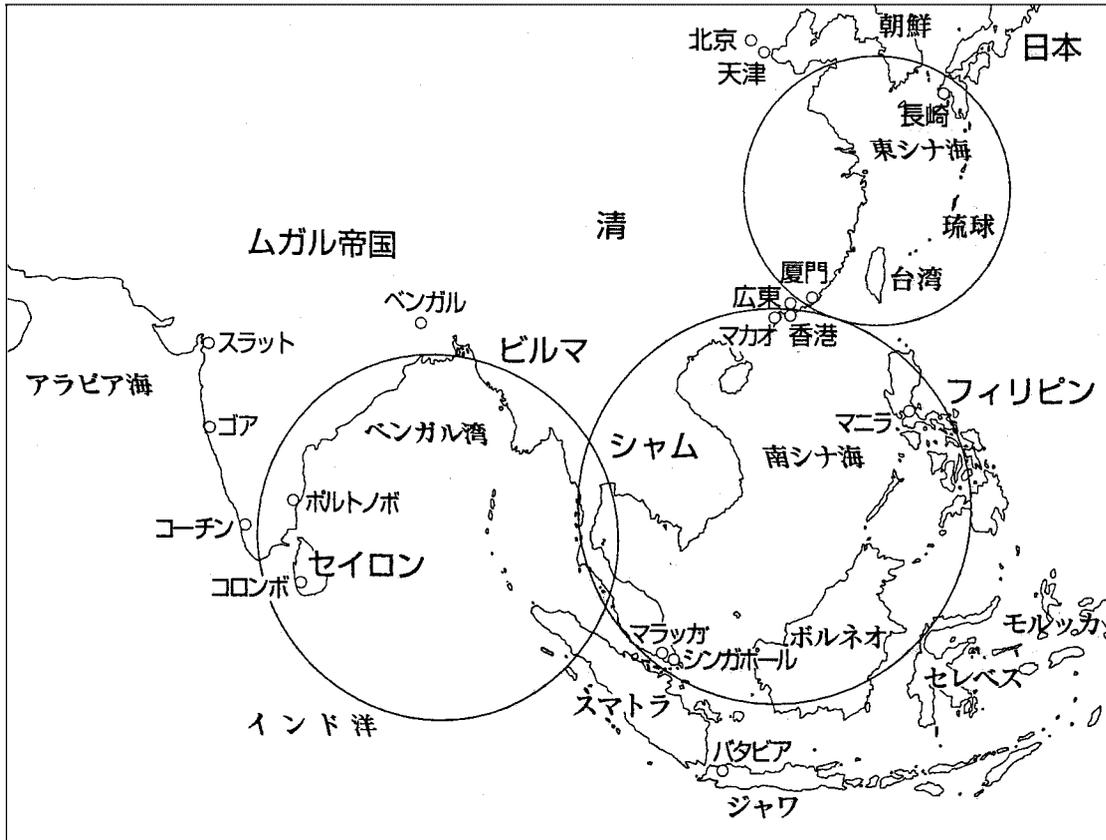
同時に、地理学と海域史の関係も興味のあるところですよ。朝貢という形で、皇帝の教えが届く文化的な、徳治的な影響力の問題が、19世紀に西洋から地理学が入ってきますと、境界として国境を引いたり、隣接地域をはっきり別の地域として認識したりするという議論が起こってきます。モンゴルとかあるいはロシアに対して境界の調査、議論を始めますけれども、地理学が導入されたときに、中国の「禹貢」でありますとか『山海経』などの伝統的な地理学の枠組みとヨーロッパの地理学との確認がどのようになるのか、という問題が出されます。あるいは経世論、経世家たちが清末に出てきますが、経世論の中でやはり海というものがどのように位置づけられたのか。例えば海港や海運を強化するという形で、それまでにはない海の視点が出されております。そういう点で伝統的な地理学の中の海あるいは河川の位置付けとは異なると思われます。例えば『皇朝経世文編』などの経世論の中に出てくる海に関する議論も、いわゆる内に取り込んだ海と、外へつなげていく海という関係の中で考えていきたいと思われます。

これから、スライドで説明させていただきたいと思われます。

図1は東シナ海、南シナ海、ベンガル湾です。海の名称がいつ、どこで、どのように生まれてきたかということも、とても興味のある点だろうと思われますが、近代の国際関係の結果でもありますし、より歴史的な、例えば日本海という表現はマルコ・ポーロ時代から表現されたりしています。東シナ海、南シナ海、ベンガル湾という海のつながりを考えますと、海域の連鎖と言いましょうか、アジアを考えるとときに、大陸部と島嶼部、半島部という三者の関係は、海が存在したことによって独特の歴史的な形成を持ってきたことがわかります。東南アジアという場合でも、やはり南シナ海を巡るという海に視点をおいて考えることにより、1つの地域的なまとまりと、地域と地域のつながりとしての海域を考えることができます。

海と海のつながりでは、沿海地域が特別に重要なところでありまして、歴史的には遷界令とか、それから倭寇もそうですけれども、沿海と関係するところですよ。

さらに海と海がつながるところに、ここでは広東、広州ですけれども、後には香港、それから南シナ海とベンガル湾が結びつくところには、マラッカ、後にはシンガポールです



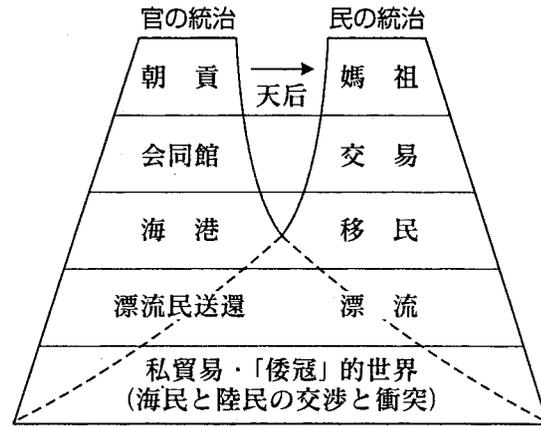
けれども、こういう戦略的に重要な交易港、あるいは移民中継地ができています。そういう点では沿海と、それから海をまたいで形成される環海としての特徴、それから海と海がつながるところに出てくる歴史的に重要な「連海」する港湾都市ができます。ですから、シンガポールは単にラッフルズが発見したということではなくて、マラッカが持っていた海と海をつなげる歴史的な機能をシンガポールが代替したと言えます。あるいは香港の場合でも、イギリスがそこを植民地にしたというよりも、むしろ広州という歴史的な海と海のつながりの機能を香港に引っ張ってきたと考えることができると思います。

そういう点で、アジアの海という範囲を考えたとき、1つの地域のつながり、それは土地という陸のつながりではない海域相互の構成を持っていると思われれます。

次に、図2はまだ作成途中ですけれども、海は水の平面ではなくて、海を利用しようとするさまざまなレベルがあって、そのレベルは便宜的に官と民という形でそれぞれが使っている。そして民の海の利用に対して、官は、そこに介入していくという場合に、媽祖という海神に、これは女神ですけれども、爵位を与えて妃として、天妃とか天后という形で、政治が沿海地方の政治、あるいは海に介入していきます。

上から申しますと、官は朝貢貿易を管理することによって海を利用する、それから民の場合には、媽祖神を祭るという行事を地域社会で行うことによって海を管理する。その下には当然交易や移民があります。他方、朝貢の下には北京での特許貿易とか、それから朝

貢使節が琉球ですと福州に入港するという海港貿易があり、そのもとには共通に漂流があり、それから漂流民送還体制が施かれています。漂流は自然的な漂流だけではなく、むしろ人為的な漂流と言いますか、朝貢という関係を利用しながら、沿海に近くなると人為的に船を壊して、そして自分たちは漂流したと主張する訳です。例えば鹿児島県の坊津などでは、役人が来る前にすでに積荷を2階の隠し倉庫に入れてしまうということもあったようです。漂着した人たちは、漂流民送還という制度、これは荒野（荒野泰典）さんたちが詳しく研究なさっていますが、琉球にも例がたくさんあります。



図の一番基底に「倭寇的世界」と書きました。韓国の南のほうに珍島という島があります。珍島犬という、秋田犬のような純粋種で有名ですが、自分たちは倭寇の子孫だとその人たちが言います。海民と陸民が日常的には交渉していて、何か問題が起こると、どちらかが相手側からうばってくるという衝突が起こる。そのような関係が倭寇的な世界という形で存在しており、これは海域が変動するときに生まれてくる状況ではないかと思っています。

こういう形でいくつかの層として海域が利用されております。ある時期にはこれらの層のどこかが強調される。また、時には官と民の関係の中でどこかが強調されるという、海の行動のパターンが生まれます。そしてそこに表現されるより広い対外関係も見えていくことができると思います。

最後に、特に海をまたいで交流や交渉が行われるということにつきまして、私は以前に高田先生から、『歴代宝案』の中に福建の方言的なものが入っているというご指摘をいただいて、関連する論文も教えていただいたことがありました。今まで陸を中心として、陸の中で共通性や違いということの問題にしてきましたけれども、海をまたいででき上がっている共通性というものは、陸の中の違いというよりもはるかに近いと言えます。海をまたいだ類似性のほうが、陸の中の類似性よりもはるかに距離は近いということを実感するときもあります。

方法的に考えますと、基本には海というところから、これまで19世紀以来の分析的な人文社会科学の学問分野の分類を、より相互関係的に、あるいは総合的な形で今一度別の場にほうり込むことができるかという方法的なところから、そして、海それ自身の実態的なところから「東方学」を考えることの必要性を感じております。海が実際に機能している場の問題が近年ますます大きくなっており、研究への関心も大きくなっていると思います。それらは『歴代宝案』、あるいは対馬の「宗家文書」などの研究からよりいっそう明らかになってきており、東シナ海、南シナ海の海域史が、資料的にも、これまでのヨーロッパ

の東インド会社の資料だけではなく、明らかにされつつあると思います。

海を巡る時間と空間は、現在の歴史学の方法問題という関心に戻りますと、両者の総合的な無限循環と言いますか、時には無限的な悪循環になっていくようにも思いますけれども、そういう海の歴史というものをもう少し深めて考えていきたいと思っております。どうも失礼いたしました。(拍手)

コ メ ン ト

人文科学研究所教授 岩井茂樹

司会 どうもありがとうございました。

それでは、本研究所教授の岩井茂樹さんのほうからコメントをお願いいたします。

岩井 濱下先生より大変にスケールの大きな、つまり東洋学にかぎらず、人文科学・社会科学にとって、一つの新しい方法を提示しようというお話をいただきました。私は濱下先生と比べてはるかに小物でしかありませんので、とてもそのようなお話に対応することができないのですが、先ほどの濱下先生の官の統治、民の統治という図式に触発されて、一つだけお話をさせていただこうと思います。

中国の歴史研究の中で、濱下先生がいわれた海洋史、海域史というものはなかば無視されてきた、あるいは遅れていたと言えるでしょう。それはおそらく近代の中国が大国でありながら一つのシーパワーとして世界に伍すことに失敗した、つまり、日清戦争において北洋海軍が打ち破られて以降、中国は一貫して十分な海軍力を持てなかったということと関係があるように思います。また、さらにさかのぼりますと、中国の国家自体が、海というものを絶えず外から押し寄せる脅威としてとらえていたのではないかという気がいたします。

もちろん積極的に海外への進出、例えば15世紀の鄭和の大艦隊の派遣のようなことが行われた時期もありますけれども、国家が直接海洋世界に乗り出していくという局面は乏しかった。例えば16世紀の大倭寇の時代に『籌海図編』という、海をどうやって籌^{ほく}るか、この問題を地図であるとか図であるとか、グラフィックな情報を豊富に取り入れた画期的な書物が書かれております。ところが、この『籌海』というものの実質を見てみますと、いかにして海の外にある資源を中国が利用するか、あるいはそこに乗り出していくかというようなことではまったくない。むしろ倭寇であるとか海賊であるとか海の脅威に対する防衛という方向からこの書物は書かれております。

それから濱下先生が触れられました魏源の『海国図志』は、19世紀の中ごろに海外事情を書いた書物として、日本にも大きな影響を与えました。つまり当時の最新の世界情報を

中国人は広州経由で獲得していたということになります。しかし、この書物の成り立ちもまた、いかに中国が、当時は清朝という国家でありますけれども、外に出ていこうかという意図の下に書かれたのではなくて、むしろアヘン戦争によってもたらされた非常に大きな衝撃にどう対処するかという方向で書かれているわけであります。

このような官の統治からしてみますと、海というのは非常に厄介な恐ろしいものとらえられていたわけであります。ところが、逆に民から海を見てみますと、中国の民というのは実に大胆に海に乗り出していった人々ではないでしょうか。時間もございませんので詳しくは申しませんが、16世紀、あるいはさらにそれに先立つ時代から、続々と海外移民が出ていく。しかし、国家はほとんど無関与でありますし、海外の居留民の保護もいたしません。そのような状況においても、民は絶えず海、あるいは海の外にあるものからいかに利益を得るか、あるいはいかに生存の道をそこに見出すかということに大胆に取り組んできたわけであります。

しかし、その2つの世界がどうやら中国ではうまく繋がらない、つまり官の統治から見た海と民の生活から見た海がなかなか交差しないということを感じるわけであります。こうしたことがおそらく中国の国家と社会との関係の一端を示すものではないでしょうか。そういう意味で、本日、濱下先生がその構想の一端を語っていただきました海域史というものは、中国の国家と社会を理解する上で一つの大きな手掛かりを与えるものであらうと感じました。以上でございます。

東方のサイエンスの復権

人文科学研究所教授 武田時昌

司会 ありがとうございます。だいが濃密な話が続いて、いささかくたびれてまいりましたが、もう1つだけ本研究所教授の武田時昌さんのお話を伺って、その後少しお休みをしたいと思います。

武田さんは、本研究所では多少変わった経歴の持ち主でございますが、京都大学の工学部の電子工学科を卒業された後、方向転換されまして、同じく文学部の中国哲学史学科に学士入学されて、以後、中国の思想、科学史といったようなものを専門に研究されています。特に数学とか天文、暦法、医学の中の科学理論とか、占いに使う易、それから老子の自然哲学などを、中国における科学思想として研究なさっております。

少し前になりますけれども、翻訳書として出されました『易のニューサイエンス』というものがあまして、現代の中国人が易の数理論に関連づけて科学論を展開したという書物ですけれども、こういったものを翻訳をされておられます。きょうの話もそれといささか関連することがあると伺っています。

また、現在、人文研に新しく発足いたしました漢字情報研究センターで「漢字情報基礎論の試み」という共同研究を主宰されておられます。

それでは、武田さん、お願いいたします。

武田 私は、中国科学を哲学、宗教や占いの境界領域で研究している者ですが、中国科学史研究は、これまでにおいて科学技術の発展史、あるいはその特色について、藪内清、ジョセフ・ニーダム両博士を中心として、その輪郭づけがなされ、これからはそういった研究を土台にして、例えば科学理論の構造とその思想的背景を探るとか、あるいは自然探究の学問が社会や人々にどのような形で受け入れられて、どのような役割を果たしていったのかということ考察する、応用問題を解く段階に差しかかっているんだと思います。つまり、科学技術史研究から科学思想史、社会史、あるいは東アジア科学論みたいな形の流れにあります。



最近、とある集まりで、研究アプローチはそのように多様になってきている反面、原典をダイレクトに読んで綿密に検討するという基礎作業が疎かになっていることを話し合っ

たばかりなので、そういう弊害についても少し強調したいんですけども、今日ここで中国科学史研究の問題点をあれこれと言い立てても仕方がないので、20世紀の後半において、東洋の復権の動向があったことを話題として紹介しながら、東方世界の科学文化、生きる知恵としてのサイエンスの存在意義とその可能性、あるいは目指すべき方向性を提言し、まますると対立的に取られてしまいがちな伝統科学と近代科学、あるいは古代と近代、科学と宗教、哲学といったものについて、学問的な融和を試みる必要性を訴えてみたいと思います。

世界科学史という大きな視点で見て、中国の科学というのはある時点まで、確かに他のどの文明よりも進んでいたように思います。そうした中国科学の先進性を、近代科学の世界制覇に酔いしれる欧米の人々に知らしめたのは、言うまでもなくジョセフ・ニーダム博士の著した『中国の科学と文明』だと思えます。『中国の科学と文明』の最初の第1冊が書き著されたのは1954年ですが、実はその年は私の生まれた年で、ひょっとしたらコメントターの吾妻さんも同じ生れ年ではないかと思うんですけども、それから半世紀ほどの間、シリーズ化されて十何冊にも及ぶ本が出て、ニーダム博士が亡くなられた後の現在でも、実はそのプロジェクトはまだ続行中で、刊行の途中にあります。『中国の科学と文明』は、他に類を見ない壮大なスケールで、中国の科学文明を西洋と比較し、そして「なぜ中国で科学革命が起こらなかったのか」というニーダムクエスチョンと呼ばれる命題を提示しました。今に至るまでの科学史の研究の課題は、そのニーダムクエスチョンに様々な模範解答を作成するところにあったとすることができるほどであると思えますが、この大著によって、中国にはもう一つの、オルタナティブな科学文明があった、ということを経験した人々に認識させるきっかけになりました。

そのニーダムの著書が非常によく広く読まれるようになったのは、1960年代後半から1970年前半にかけてだと思えます。1960年代の後半というのは、ご存じの通り近代科学の神話というものが崩壊し、機械文明に対する懐疑が非常に強まって、非西洋、反近代の運動が起きた、いわゆるカウンターカルチャーの時代です。ドロップアウトしたヒッピー達は、原始共同体への回帰をめざして、東洋の神秘思想、精神世界に強い関心を示し、東洋文化の復権の端緒となりました。

彼らの反体制的な平和運動というもの、あるいはエコロジーの主張みたいなものが、現実の社会の中でどれほど大きな変革に結び付いていったかと言うと、それは少し考えてみないといけない部分があるんですけども、例えば弱者の立場から強者の論理を転覆するとか、価値観を相対化してものを考えるという形でのパラダイムシフト、意識変革というのは、人々の生き方、考え方、ものの見方を変化させる、非常に大きな影響を与えたように思うんです。それは実に大きなターニングポイントだったように思います。

1970年ぐらいになりますと、ラブアンドピース世代に支持された新しい考え方は、実際的に自然科学の分野でさまざまな注目すべき学問的な成果をあげ始めました。極めてユニークな発想で、斬新な仮説を唱えるサイエンティストの中には、東洋に強い関心を持つ者

が数多く含まれておりました。それも量子力学とか大脳生理学、生命科学、実験心理学等々の、先端科学の分野であったのですが、近代科学を超えるために新しいコンセプトを探そうとして、東洋に熱い眼差しを向けたのです。ニーダムの著作や禅を紹介した鈴木大拙の著作などに知的な刺激を感じて、老荘思想であるとか易、禅、インドのヨガ等々の東洋思想のアイデアをアナロジーとして、新しい理論仮説を解き明かそうとしたわけです。例えば素粒子の動きをインドのシバ神のコズミックダンスになぞらえたり、その性質は大極図における陰陽の相補性に極めて近似しているところがあるとか、そういった具合です。

そうした発想の転換によって、近代科学の学問的な方法論であった機械論的自然観、要素還元主義に痛烈な批判を浴びせ、物質世界だけではなく精神世界にも少し科学研究の枠を広げて、ビッグバン宇宙論、地球と生命の起源から意識や深層心理の解明、サイコセラピーに至る、非常に広範囲な領域において、総合包括的な科学論を展開したわけです。

欧米の新しい科学運動、ニューエイジ・サイエンス・ムーブメントというんですけども、その著作や学説が日本に紹介されるようになったのは、1980年よりも少し前ぐらいからで、1984年に筑波で国際シンポジウムが行われたのが、その一番の最盛期だったように思います。それがいわゆるニューサイエンスブームです。

先端科学のサイエンティストたちが東洋思想に傾倒しているというのは、学問的に極めて真摯なものであり、注目すべきだったと思うんですけども、日本でのニューサイエンスブームというのは、学問的評価のあまり伴わない、低空での打ち上げ花火に終わってしまった感があります。その理由として、東方の思想や文化に対する非常に大きなカテゴリーエラーがあったように思います。

本日は、それを東洋医学について具体的に少しお話ししようかなと思うんですけども、欧米のサイエンティスト達は、ヨガとか禅とかの直接体験における修行体系というものに非西洋的なものを見出して、瞑想の効能といったものを、例えば実験科学的に確かめて、こういう形の脳波の変化があるんだというようなことを検証し、そしてトランスパーソナル心理学や心理療法の新しい学問方法論を打ち立てて、臨床のセラピーに応用しようと思いました。また、「気」という概念に非常に強い関心を示して、気の医学としての鍼灸医学というものにスポットライトを当てました。

ニューサイエンスの学問観の根幹となる考え方なんですけれども、近代科学は物質を細分化し、分割可能な要素にできるだけ細かく分けて、それを徹底的に調べることで、全体像を把握しようとしたのですが、遺伝子の構造なんか分かってきて、生命自体が具体的に科学レベルで議論できるようになると、新しい局面を迎えました。生命体というものを考えてみますと、分化した部分をすべて寄せ集めても、機械のように全体が再現できない、つまり部分の総和が全体にならないこと、部分の中に全体性があるという隠された秩序が見逃されているということに気が付いて、それをいかに解明するかということが大きな問題として浮上してきたのです。

ところが、鍼灸医学の診断法や治療法には、全体包括的な考え方、部分において全体性

を把握する方式が確かにあります。例えば耳、手足にあるツボや脈のというのは、それを診ることによって、身体的な異常が判断でき、治療が施せる、つまりその部位には全身のあらゆる情報が内在する、これは量子力学や大脳生理学で盛んに議論していた部分の全体性である。そういうのを前提に中国医学は診断を行い、治療を行ってきたということで、ホログラフィックな医療方式が大いに注目を集めたわけです。

すると、それまで骨折とか手術後のリハビリの補助者として、病院の片隅に追いやられていた鍼灸師達がにわかに活気づきました。それで何を主張したのかというと、もちろん一部の人ですが、東洋伝統医学の驚異の気のパワーだとか、手をかざしただけでどんな病気もたちまち直せる、エイズでもがんでも何でももう怖くないぞ、これさえ飲めば治るとかいう特効薬を売り出したりして、そういうマジカルヒーラー的な、まるで怪しげな新興宗教のキャッチフレーズでもあるかのような、奇蹟と神秘を気の医学というものを語り始めたのです。

つまりニューサイエンスの日本での取り上げられた方というのは、精神世界の神秘とか超常現象といったものを解明する科学、オカルトのサイエンスとしてであって、だからマスコミが大いにもてはやされてしまったわけですね。でも、東洋医学の復権という立場で、その本質的なものをよくよく考えてみれば、それはまったく逆の方向で考えないといけなかったんじゃないかと思います。

現代医学というのは、確かにコレラとかペストとかの、大量に人を死に追いやる恐怖の伝染病というものを克服してきました。古代人から見れば、それはまさに奇蹟の医学だったと思うんですけども、その現代医学が手も足も出ないような、病因すら探り当てることができない難病、奇病を、鍼灸医学が引き受けようとするならば、それはたまったものではありません。現代医学は重病患者を救うためのすぐれた医療器械と技術を開発したのですが、一人の人間の人生を考えれば、そんな大病を患うのは一回か二回なはずです。ところが、日々の暮らしの中で、身体的な違和感やストレス性の倦怠感は、日常的に存在して実に悩ましいものです。しかしながら、良心的な、金儲けに走っていない医者ほど、命に別状があるわけがなければ、自律神経失調症、虚弱体質と命名するだけであまり相手にしてくれないし、検査の数値が正常値の範囲に入っていて、異常な部位が見つからなければ、薬一つもらえないで帰されてしまうということがあるわけですね。

ところが、伝統医学というのは、日々いかに健康を保ちながら長生きしていくかということについて、非常にさまざまな知恵を集めて工夫を凝してきたところがあるわけです。そういう意味で伝統医学の本質的なターゲットというのは、死に至る病は治しようがないから、それに遭遇する前に、いかに健やかに末永く楽しみながら生きていけるかということにあったように思うんですね。ですから現代医学では取り扱おうとしない、虚労状態からの脱却、体質改善にいろいろな処方を出し、また養生という考え方を重視し、病気にならずに日常的な健康を保ち、長寿を達成しようとすることに、知恵をしぼってきたのです。現代医学にない文化的な広がりや、そこに保有しているように思われます。

医学というものが進歩しても、健康とか長寿のサイエンスというのがそのまま成立するわけではありません。もしそれを実現させようとするならば、それは医薬学の知識だけではなくて、いかに生きるかという哲学、人生観、あるいは処世術であるとか、幸福を感じさせるもの、文学、趣味、娯楽とかスポーツとか、様々な分野の知恵を結集する必要があるでしょう。そうした生きる知恵としてのサイエンスを希求するのであれば、伝統医学や養生思想に発揮された古代人の叡智に大いに学ぶべきものがあるように思われます。

そのことをもう少し掘り下げて考えてみますと、長生きするのにこれといった秘薬とか秘訣とかがあるわけではないわけですよ。健康を維持するための養生の在り方というのは、その時代の医学知識によって理屈付けの表現は変わりますが、今も昔もそれほど変わっているわけではないわけです。伝統社会の人々は、そうした時を超えて変わらない養生の知恵を綿々と語り継いできたように思います。それは、現代科学が、既存のものよりもよりよいものを、先陣を切って争うのとは対照的です。

学問研究というのは、常に新しい発見、発明に躍りになってしまいます。科学史研究でも、誰がいつ発見し、それで何がわかってどのように新しくなったのかに、ついつい注目してしまうんですけども、実際的にそういう差異ばかり見つめていると、ずっと伝えてきた大切なものを見逃してしまうのです。同じことは歴史や文学の研究でもいえることだと思います。どんな変革、変容があったのかという時代的な推移、変遷ばかりに着目してしまうんですけども、大事なものは、ひょっとしたら昔のままでありつづけているところのもの、変わらず親しまれているものがとても価値のあるものであるかもしれないわけですね。哲学と科学だって、今はまったく違うものに考えられていますけれども、その訳語が定着する前は、いずれも「理学」という訳語が存在したように、本質的に共通の部分もあるわけです。東方学の再構築を目指そうとする一つの指針として、これまでの学問区分を取っ払うとともに、考察対象も差異ばかりではなくて、共通の部分を探ることに目を向けていくような方向性があった方がいいんじゃないかなと思います。

そうしたときに、欧米のニューサイエンスの人々の見ていた東洋というのを見ると、確かにそれは神秘思想と言っても、禅であり、タオイズムであり、インドのヨガであり、イスラムのスーフィーズムまで全部一緒くたにしているから、我々にとってみれば、それぞれは異質なものとして映るわけですよ。空手、相撲、柔道、弓道、剣道から生け花、扇子、漢字に至るまで、共通した東方なるものを見いだしています。それは実際に存在する東洋ではなく、我々にとってみたら異なる日常性を持ったものです。ところが、彼らにとってみると、それはやっぱり1つの東洋である。そういう意味では、東方の神秘的な国々に何か素晴らしいものがあるという幻想が生んだ、幻想の中の東洋であるわけですけども、それは我々がヨーロッパを見るときに、イギリスもフランスもドイツも区別なく憧れの西洋として見るのと対称的です。憧れの西洋だから、近代化を実現させることができたと言えなくはないのです。幻想の東洋、憧れの西洋、そこに見いだされる何か、そういう立場を取ることによって初めて共通性とか、古今にずっと伝えられてるものを見つめるこ

とができる，そうした見地においてニューサイエンティストたちの唱えた東洋の復権というものには，非常に意義深いものがあったように思うわけです。

今，幻想の東洋みたいなことを言いましたけれども，幻想を生じさせるためには，やはりそれを生じさせる何かがあるわけですね。憧れと幻想というのは，学問の裏表に常にある，学問を推進させる好奇心と想像力の源であるように思われます。今日，用意した資料ですが，澁澤龍彦の『幻想博物誌』に収められた「スキタイの羊」にニーダムの名前が登場するんですけども，ニーダム説に対する彼の手短な講評というのは実に的を射ているように思います。実はニーダムの著書はスケールの大きな東西比較論を主張しただけではなくて，非常に実証的な部分がある，ということを澁澤龍彦は鋭く指摘してるんですけども，それは，数学，天文暦学，医学，技術史等の自然科学の個別の分野における，戦前の中国と日本の科学史研究の実証的な研究がベースになっていて，その精華を集約しているからに違いないわけですね。澁澤龍彦の書名に「幻想」の二字が冠せられているのも示唆的な気がするのですが，我々の東方のサイエンスの1つのあり方，あるいは目指すべき方向性は，西と東の科学文化の相互作用を促進させるものであるべきだと思います。物事は，陰陽，左右のバランスにある，という易の思想に依拠すれば，東方のサイエンスを復活させ，その相補的な作用を発揮させることで，西のサイエンスに新たな着想のブレークスルーを起こさせ，西にも東にも過不足のない発展をもたらされるのではないのでしょうか。資料を読み上げる時間がなかったんですけども，哲学が科学と同じ言葉でいわれていた明治の初期においては，近代科学を阻害するものとして，漢字の廃止論が唱えられるとともに，旧態依然とした漢学者も厳しい批判にさらされました。しかし，今は旧漢字に関しては，まったく状況は変わりましたよね。ニューサイエンスの流行った1980年代というのは，今から思えば，同時にパソコン革命が進行していて，1990年代にはインターネットの普及によってさらに拍車がかかり，ワープロ機能搭載のパソコンが紙とペンに替わる学問のツールとして急成長しました。そして，漢字はずっと制限される方向で虐げられてきたわけですけども，コンピュータ世界で7万字以上の漢字が一挙に復活を遂げたのです。パソコンの階層構造とか，あるいはインターネット上での知のクロスの仕方というのは，僕は中国文献学をやる上で非常にマッチするところがあると思います。ですから，前近代的な旧弊の代表格と駁された漢学者もパソコンを自在に使いこなし，バーチャルリアリティーの世界で漢字とともに見事に復活してはどうでしょうかと，最後に言い置いて発表を終えたいと思います。（拍手）

コ メ ン ト

関西大学教授 吾妻重二

司会 どうもありがとうございました。

それでは、コメントを関西大学文学部教授の吾妻重二さんをお願いしたいと思います。

吾妻 吾妻でございます。今、武田さんは科学史研究のプロとしての立場から発表をなさいました。欧米の科学論の展開を踏まえつつ、非常に大きな視野を持って述べられたのですが、私自身は科学史の研究をしているわけではありません。中国の思想史、それを儒教の研究を中心にして考えていますので、武田さんのご発表に正面からコメントすることは、私の能力ではできない、正面から論じる立場にないとまず申し上げなければなりません。

しかし武田さんは、単なる科学史や技術史の展開を追うという研究だけでは不十分であって、そこには思想史や文化史といったものの展開もあわせて見ていく必要があるという趣旨のことをおっしゃいましたので、そういう点では私のやっていることと接点が生まれるかと思います。

私の研究していることに無理やりひっつけて話をさせていただきたいのですが、思想史研究の面から科学史を見るとどうなるか、ということなんです。中国の科学史に限定して話をしますと、たとえばこれまでは道教と科学との関係が盛んに論じられてきました。これは皆さんご存じの通りです。しかし、これは最近感じていることなのですが、儒教と科学との関係はどうなのかということが一つあると思います。

こういうふうに申し上げますと、この二つは相容れないものじゃないかとお考えになる方が多いのではないのでしょうか。それが明治以降、近代的学問が始まって以来の一般的な認識だろうと思います。朱子学と科学は相容れないものであるという認識、それは日本においても中国においてもそうであったろうと思います。

福沢諭吉の有名な言葉に「陰陽五行の惑溺を払わざれば窮理の道に入る可らかず」(『文明論之概略』)というのがあります。この「窮理」は近代科学の意味であって、ここで福沢が近代科学の意味で朱子学の「窮理」という言葉を使っているのは非常に面白い事例なのでありますが、それは置くとしまして、儒教なり朱子学なりの知の体系を否定したところに近代的学問が成立するというこのような認識が日本、中国を通じて定着していると思います。

しかし、必ずしもそうではないのではないかという感じを私は持っています。この点について初めて見直しを行なったのは、たぶんニーダムさんではないかと思います。ニーダムさんは『中国の科学と文明』の中で、朱子の自然哲学を高く評価しています。朱子学の持つ理気論、自然哲学が中国の科学技術の発展に寄与したのではないかという予想を述べているのです。しかし、この予想を、ニーダムさんは十分には実証していない。実際に朱子学が科学の発展に寄与したという事例を見つけてこないといけないのですが、ニーダムさんはそこまでは調べていないと思います。

ところが、これを受けて山田慶兒先生がそれをなされた。『朱子の自然学』さらには『授時暦の道』という本の中で朱子の自然学について詳しい研究をして、面白いことを言っておられるんですね。『授時暦の道』の中で、授時暦は非常に新しい、画期的な暦であ

ると。これはどうしてできたかという点、イスラム暦の影響であるというのが旧説であったが、決してそうではない。イスラム暦の影響は限定的なものであって、画期的なものができたのは朱子学の理念が背後にあったからだ、というんですね。たいへん大胆な解釈だと思いますが、しかし実際、授時暦を作った科学者、技術者たちの中に朱子学者がたくさんいたことは事実でありまして、それは山田先生が証明された通りであります。

こういった科学技術と朱子学の関係というのは、調べていくと、いろいろ出てくると思うんですね。科学技術だけではなくて、実証的な学問、実証的学芸というところまで範囲を広げてみますと、朱子学と実証的学芸との関係というものは、さまざまなところで見出すことができるように思います。

いろいろな事例が考えられますが、1つの例だけをごく簡単に挙げさせていただきますと、武田さんもかつては科学と哲学は一緒になっていて、言葉も同じであったとおっしゃいましたが、なるほどその通りでありまして、明末清初に中国で活躍したイエズス会士たちの場合を見てみると、そのことがよくわかります。イエズス会士はフィロソフィアを「格物窮理の学」と訳しています。フィロソフィアというのは当時は一種の総合的学芸でありまして、この中にはロジカ（論理学）、フィジカ（自然学もしくは物理学）、メタフィジカ（形而上学もしくは存在論）、マティマティカ（数学もしくは幾何学）、それからエチカ（倫理学）、これらが全部含まれていて、これを総称して「格物窮理の学」と訳しています。

つまり西洋の科学的知見というのを朱子学の格物窮理の枠内でとらえていたわけです。なぜそんなことになったかという点、言うまでもなく朱子学と当時の科学との間に一種の共通性、親和性というものがあつたからです。このような訳語が選ばれたのは決して恣意的なものではなかったのです。私も今調べているところなのですが、論理学とか自然学、あるいは科学技術一般というものも、彼らは「格物窮理」とか「格物致知」、「格知」という言葉で呼んでいます。

近代になって、中国が西洋の近代科学、これは非常に専門化した近代科学ですが、それを取り入れるという時になって、近代科学、サイエンスの訳語として「格知」という言葉が用いられたことは周知の通りであります。これは偶然ではないのであって、なぜ「格知」という言葉が用いられたのかという理由、その道筋を、朱子以降の思想史や科学史の中に実際にたどることは可能であろうと私は考えています。

こういうふうに見てきますと、中国の科学の発展には道教が当然かかわっていますが、儒教もかかわってきたのではないかということも、もう一度考え直す必要があると思うんですね。朱子の知の体系というのは非常に巨大なものでありまして、朱子学の中身とその歴史的役割というものは、あえて正直な感想を言いますと、まだ十分には解明されていないように思われます。朱子学の研究には何百年という蓄積がありますが、朱子の考えていた体系には研究する余地がまだまだ残っていると考えているのです。

私自身の関心に引きつけて、武田さんの発表にコメントをさせていただきました。以上

です。

司会 どうもありがとうございました。

総合討論

司会 先ほど、ちょっと休憩をすると申し上げたんですけれども、見通しが甘かったようです。この会場は実は4時まででございまして、あと25分しかございません。そこで誠に申し訳ないのですが、第3回目のまとめのシンポジウムでもありますし、総合討論に時間を割けないのは非常に残念でございますので、今しばらくご辛抱願って、このまま続けさせていただきたいと思います。

本日は4人のパネラーの方々のご発表があったわけですが、愛宕さんのほうからは教育の問題、それから金さんは文献と芸能とを結ぶ線の問題、濱下さんからは海域史という、これまでの歴史の視点を少し変えたらどういふふうに見えてくるかという話、そして今の武田さんの話とあったわけですが、本題であります「東方学の再構築」ということとの関連において、それぞれのご発表に対するご質問でもご意見でも結構ですので、会場のほうからご意見を承りたいと思います。どうぞ自由に手を挙げて、最初にお名前と、もしご所属があればご所属をおっしゃっていただきたいと思いますので、いかがでしょうか。

富谷 人文科学研究所の富谷と申します。愛宕先生のご研究について発言いたしたいと思います。実は私、数年前、もう10年になりますけれども、大阪大学の教養部におり、一般教養を担当していました。また、京都大学に移ってきまして、現在は文学部と法学部で教えておりますけれども、法学部の学生に対しましては、これは専門教育および大学院教育でも同じである。教養教育に毛の生えたようなものなんです。



そこで愛宕先生がおっしゃったことの1つにレベルの問題、レベルを落とすか落とさないかという問題がありました。ご承知のように、特にこれは京大と東大に偏った現象と言えるかもしれませんが、今日、6年制一貫教育の私学進学校出身者が大変増えております。そこでの教育というものが、例えば歴史においても、中学校のときでもう世界史を学ばないのだと。ないしはそういうことは必要なくなっているという人たちが増えていると言いますか、そういう形が多いと、実際私も経験しております。特に学生の中では、

止まっている。それが京大の学生に徐々に増えつつある現象だとも言えると思います。

そういったしますと、京都大学であるがゆえに、逆に中学程度までレベルを下げて教育しなければならないのではないかという、こういう皮肉な現象が起こっているのではないかと。私は悩み、かつ解決の手段がないのですけれども、愛宕先生はどう思われますでしょうか。

愛宕 その点は私は割と楽観的なんですよね。つまり中学校、高等学校一貫制で、早めに向かい初等的な歴史学を履修し終わって、そのまま大学に上がってくる。それでも歴史学の本当の面白さというのは、要するに中学校、高等学校の教科書からはまず得られませんわね。だから、大学に入ってきて、私のイメージは旧制の高等学校のイメージなんですよね。私が自分自身そういうものを経験したことがないわけであって、ただ、イメージとしてはああいう形で、本当の意味での、本当の意味かどうかは、これはちょっとオーバーになりますけれども、別な意味での、あるいはまた歴史学のそれなりの面白さというのは与えてやることのできるんじゃないかという気はしております。事実、8割5分の学生はもう駄目ですけれどもね。残りの1割5分、場合によっては1割ぐらいの学生は、おそらくそういうこちらの意図が伝っているのではなからうかなという気はしております。少なくとも京大の学生に関しては。

富谷 どうもありがとうございました。

司会 ほかになにかございませんでしょうか。どうぞ。最初にお名前をお願いいたします。

内山 内山と申します。愛知大学です。金さんと、それから武田さん、吾妻さん、2つについてよろしいでしょうか。金さんの先ほどのお話の中で、中国の継子いじめ説話では、継母と継子との間に性的関係があったと言い立てるというモチーフが少ないと伺いましたけれども、もちろん金さんはご存じだと思いますけれども、古く『韓非子』の姦劫弑臣篇というのに、楚の春申君という人物の話がありまして、春申君の妾が春申君の正妻と息子を陥れ、正妻については、正妻が妾を殺そうとしたと言い、息子については、息子が妾を犯そうとしたと言う。春申君はそれを真に受けて正妻を離縁し、息子を追い出してしまうという話があるのはご存じかと思いますが、あるいはこの話も、継子、継母の関係じゃありませんけれども、そのモチーフにつながるものがあるんじゃないかと思いますので。個別のことですけれども、小さいことですけれども、申し上げたいと思います。

それから武田さんと吾妻さんは同じですけれども、吾妻さんがフィロソフィーのことをおっしゃいましたが、古代ギリシャではフィロソフィアは自然学をも含む、その通りだと思います。ただ、西欧ではこれは次第に分化して、一方で哲学が樹立する。さらに自然学、自然科学、あるいは政治学、経済学と次第に学問体系を整えていくということがありましたが、中国ではそういうことがなかった、あるいは少なかったということ。そういうこと

が1つの大きな問題になるかと思えます。

そこと関係して、武田さん、吾妻さんのお話で感じましたのは、道教なり儒教なりの中に、科学、あるいは科学的な思惟を生み出す力があつたということはわかりましたけれども、同時にそれを阻害する、あるいは停滞させる要素があつたんじゃないかと思えます。ニーダム氏が問題にしているのも、1つはそこじゃないかと、私、素人ですが思いますが、それはいかがでしょうか。この2つについて、意見と言うか質問と言うか、申し上げた次第です。

武田 ニーダムは確かに、なぜ中国では科学革命が起こらなかったのかということの問題にするわけですが、近代科学的な研究成果というのは、中国では実は、科学革命を推進した数学や天文学の分野でも大いにあつたわけですね。それが広がりを持たないというのは、学問的な基盤だけではなくて、科学知識がどういうベクトルで人々の中に浸透していったかということも考えないといけないと思うんですね。科学理論というのは、ややもするとどうやってつくられたかというのが問題になるんですけれども、実際社会において問題になってくるのは、人々にどういう形で浸透していくかということだと思つので、そのことについては実はまだ研究されてないので、大いに研究してみたいと思つます。科学知識の啓蒙や教育の面から見ると、必ずしも阻害されるような社会状況であつたとは言えないかもしれません。

吾妻 近代科学の目から見ると、当然結果として中国は近代科学を生み出さなかつたわけですから、なにか阻害要因があるはずだという問題設定の仕方ができると思つますが、しかし、それは問題設定の仕方がちょっとどうかなと思うんですね。近代科学は、武田さんにご専門ですが、非常に特殊なもので、科学革命があつて生まれたものであつて、するとそれ以前の時代、あるいは西洋以外の国には科学はなかつたのかと言うと、必ずしもそうではなくて、これをエスノサイエンスと呼んだりするんですね。そういうものとして朱子学との関係を考えることは可能だと思つます。

司会 金さんはよろしいですか。

金 どうもありがとうございました。さっきは時間の関係で簡単に申し上げたんですけれども、私が申し上げた意味は、日本やヨーロッパと比べて、例えば昔話とか説話とか民話とかいうものの中にそういうものが少ないということで、実際に少なかつたかどうかということは別問題として、歴史書などにはそういう例は非常にたくさんあると思つます。そして、それらのいわゆる歴史事実の背景に実は説話的な世界があるのではないかと思つます。たとえば『韓非子』の春申君の話などは、一見歴史事実のように語られていますが、実はおそらくそうではない。また、教訓話のようになっていますが、元来は説話ではなか

ったかと思えるのです。それが歴史事実を装った教訓話になったために、話自体の性格も変化しています。例えば二十四孝のような話の場合も同じで、説話的世界が背景にあるのではないかと私は考えております。

内山 もう少しお伺いしたいんですけども、時間がないでしょうから結構です。

司会 ほかにどなたか。どうぞ。

小南 人文科学研究所の小南です。金さんが説話の原型的なものは世界に共通してるということ、その通りだと思うんですけども、それをどういうふうに解するかについて、これまで神話なんかについては伝播論的なもの、あるいは独自の発生論的なものが絶えず議論になって、なかなか結論がつかないままにきてるわけですね。中国の説話についても西洋に共通するという事は、いろんな点からいわれてるわけですけども、それをどういうふうに解したらいいかということなんですけれども、私はそういう方向でやっても水かけ論になるんじゃないかと。むしろ1つのルーツになるような説話のパターンがあるとするれば、それが伝播したかどうかは別にして、それぞれの文化の中での現れ方を問題にするほうが、より生産的ではないかと思うんですけどね。

例えば継子いじめの話についても、日本の継子いじめと中国の継子いじめは相当大的な違いがあって、日本の場合は継子というのはひたすら弱いものとして描かれて、最終的には踏み殺されて骨になってしまう。その骨が復讐するという話になることが多いんですけども、中国の場合は反抗するんですね。それからもう1つは、継母よりも兄嫁がいじめることが多い。おそらくこういったのは、1つの原因で説明できるかどうかですけども、例えば中国における相続と日本における相続とは違ってて、日本だと総領が全部相続する。それに対して中国の場合は分子相続、それぞれが権利を持っている。だから、継子いじめの話でも、継子は一応畑をもらっても、極めて収穫量のない畑をもらうという形になってて、確かに根は1つであっても、文化の中での現れ方の違いがあって、その現れ方の社会的な背景を考えるほうがより生産的ではないかと、これは私の研究の方法なんですけれども、そう思ってます。

金 まったく同感です。私も別に伝播の問題だけに興味があるわけではないんで、ただ、同じ話があると、どういう関係にあるのかなという好奇心が生じるのは自然だと思います。実際には伝播と発生の問題は複雑にからみあっているんで、どちらからの考察も必要で、伝播か発生かという問題ではないと思います。そしてきょうの私の話は、むしろ小南先生に近い方向でお話をしたつもりなんです。

というのは、さっきは時間の関係で2つ驚いたことを申し上げましたが、実はあのとき、

もっとたくさん驚いたことがありまして、その中でも最大の、いくつもあるんですが、時

間の関係で1つだけ申し上げますけれども、その学会を主催した広西壮族自治区の芸術研究院の所長が芝居を一緒に見てるときに、これは文化ではないと言ったんですね。所長さんは北京大学を出た人なんですけれども、彼の言う文化というのは、現在の共産党が認める文化、あるいはそれ以前の儒教的な文化であって、こういう地方でやっている半分迷信的な、これは宗教劇なわけですが、これは文化ではないとはっきりおっしゃいました。そしてこの会議はこういうものをなくすためにやってるんだとおっしゃったんです。(笑)

文化が普及して、こういうものがだんだんなくなるように、こういう活動をし、こういう会議もやってるんだということです。これはこの事例だけではなくて、いろんなところで感じることでございますけれども、中国の知識人の持っている文化観というものと、私などが持っている文化観とはそうとうに違うようで、私はいまビデオでお見せしたようなものは立派な文化だと思います。この問題については、ずいぶん中国の方と討論しましたが、あまりわかってはいただけませんでした。こういうものは文化ではないという中国の長い伝統的な文化観の下で、小南先生がおっしゃるような説話の中国的な変化というの、大きい意味では起こったんだろうと思います。

きょう私が申し上げたかったことは、今後の東洋学にとって、私が考える一番重要なことは、これまで中国と私個人との間の文化観の違いというものは一応のけといて、個々の分野での事実の研究というのをやってきたわけですが、今後はそういう視点の違い、お互いの文化観の違いというものをぶつけていくような方向での研究も、そういう態度でやっていくことも必要で、それが私のためでもあるし、こういう言い方をすると僭越かもしれませんが、中国のためにもなるのではないかと私は考えているわけです。きょう、私が本当は言いたかったことはそのことであります。

司会 議論が盛り上がってまいりましたけれども、ほかに会場から何か。

石谷 どうもありがとうございました。私は元高校教員です。石谷と申します。京大のほうの高等教育の教育システム開発センターのほうへレギュラーメンバーでいつも行ってるんです。それで愛宕先生のご発言に関しまして、ちょっと感じるがありますので、申し上げたいと思うんですが。

だんだん大学は高等学校化してきている。(笑)しかし、京大は研究大学と銘打っていらっしゃるわけですから、愛宕先生がおっしゃったように、専門性とレベル、水準を下げないということではっきりおっしゃってますので、非常に心強いと思うんですが、しかし、実態は、ここの元総長の井村先生は、研究大学もいいけれども、もっと教育を一義的に考えなあかんでいつもおっしゃってるんです。私、それを聞いてまして、今、学校で欠いているのは何かという点から考えますと、やっぱりレベルを下げないで、わかりやすく現代社会にどうこたえなければいけないものかというならば、きょうの「東方学の再構築」という点、すばらしいテーマだと思うんですが、私は専門性の再構築ということが、今、

問われてるのとちやいますかと考えておりますので、大変生意気なことを申し上げましたけれども、よろしくお願ひしたいと思ひます。

愛宕 お答えになるかどうか分かりませんが、今は京大を含めまして、どこの大学も研究大学というものは表向きは存在いたしません。(笑)つまり教育という社会的に還元すべきことが極めて声高に叫ばれておりまして、少なくとも格好だけはつけなくてはなりません。ですから、その場合には大学における教育、特に初級の1, 2回生相手の教育というものが非常にうるさくいわれる。いわゆる教養教育でございますね。それを我々が一手に引き受けさせられて、他学部からああでもない、こうでもない、やいのやいの言われる、まさにそういう状況に、現在、われわれが置かれているということを、あらためて強調させていただきたいと思ひます。

司会 いろいろご意見が出ておりますけれども、濱下先生の「海域史から見た東方学」、海域史というこれまであまり重視されてこなかった分野だと思ひますけれども、そこから新たな歴史、あるいは歴史の動態が見えてくるという大変面白いお話だと思ひます。この点に関して何かご意見ございませんか。

伊藤 帝京大学の学部生で、伊藤と申します。僕はまだ学部生ですが、琉球などに興味がありまして、東大はじめいろんな大学の大学院生の方の勉強に交ぜてもらって、琉球古文書を読む会などに参加しています。先ほどの濱下先生のスライドを拝見しまして、海域利用の5層構造、官と民というお話がありました。官は朝貢、一番トップにして交易のようなことでまとめられているのがわかりました。とても印象的だったのは、民の一番トップが媽祖信仰ということでした。そこはよくわかりました。媽祖信仰というのは民間信仰の1つだと思ひます。ほかに民のほうでも、2番目から下は交易に関するものかなというふうに感じておもしろかったですけれども、このことに関して先生にもう少しお聞きしたいと思ひます。

濱下 媽祖は、福建の湄洲というところの民間の女性の海難救助にまつわる信仰から海の女神になった伝説なんですけれども、それは移民とか交易に伴って、例えばすべての船が媽祖の像を持っているわけですね。木の小さな像です。神戸の場合でも、船が着くと媽祖像を媽祖廟、関帝廟に祀っておき、出港のときにはそれをまた持って出ていくという形で、媽祖は理念としての信仰だけではなく、もう少しネットワークとか媽祖廟を巡る地域社会の組織とかいうことと関係しております。媽祖廟の点在するところをずっと見ていきますと、移民とか交易の活動の範囲がわかるわけですね。そして東南アジアへ行きますと、鄭和の遠征のときに、三宝公といいますけれども、鄭和が海を鎮めるために廟を建てたという伝説で、やはり海の守り神が繋がっていくわけです。

それから移民に伴って、例えば中国の四川省にも媽祖像、媽祖廟があります。そこは海とは直接関係なくても、沿海地域からの移民で媽祖の圏が広がっていると言えます。例えば台湾でも500ぐらいの媽祖廟が今でもありますし、香港だけでも二、三百あります。沖縄では菩薩といってるわけですが、地域によって、日本でも東北地方の下北半島まで媽祖像を祭った形跡があります。このように、海の守り神の動き方に置き換えて追ってみると、ある一つの活動範囲のイメージが出てくるというところで、私は沿海社会の問題も含めて、媽祖というものを一番上に置いてみて、その下に交易とか移民とかいう活動を置いてみるとどうなるかと考えてみようとしているところなんです。

司会　そろそろまとめをしなければならぬ時間になってまいりました。全体のシンポジウムを通してのまとめをするということは、私の能力に負えるところではありませんが、これまでのシンポジウムでの議論を含めまして、簡単に私なりのまとめというものをここで述べさせていただきたいと思います。

今回のテーマは「東方学の再構築」ということであつたわけですが、再構築というからには、最初に所長のほうからあいさつがりましたが、その中で継承すべきものと否定すべきものがあるということであるわけですが、主要なこととしては、研究対象というものが非常に変わりつつあるということがまず第1にあるかと思ひます。そしてその研究対象の変化につれて研究方法も変えていかなければならない。あるいはその再構築が迫られているということになるかと思ひます。

具体的には、この3回のシンポジウムの中でたくさん例があがってまいりましたけれども、これまでの文献中心の研究方法ではこれからの研究対象を十分にフォローできない、あるいはそういったものだけではカバーできないものが研究対象にどんどん加わってきてる。従つて、現地調査とかのフィールドワーク的なものと、文献研究の適度な相互補完的な運用が必要になってきているということが、この3回のシンポジウムの中でおおよそ共通して語られてきたことではなからうかと思ひます。

そしてこうした研究対象、あるいは研究方法の再構築と同時に、研究者そのもの、あるいは研究に対する興味を持つ人間をどういうふう再生産していくかという教育の問題が非常に重要だろつと思ひます。

現在、社会が全般的に古典的な教養というものに対して重きを置かないということは、我々が日々身にしみて感じているところであるわけですが、その結果、今まで日本の東方学、あるいは中国学といわれるものが持っていた優位性というものが非常に薄れてきていると思ひます。特に若い人の古典に関する教養、あるいはこれを漢文と言つてしまつと具合が悪いかもしれませんが、そういったものも含めた中国、あるいは東アジア全体の古典に対する教養、あるいはシンパシーというものが非常に希薄になってきています。

そういたしますと、今まで漢文とか、あるいは日常の生活の中で得ていた基礎的な知識

が非常に少なくなっているわけで、今や欧米の中国研究者とスタートラインでほとんど変わりがなくなっているのではないかと。そういう段階まで来ているように私には思えます。したがって、はっきり言って欧米型の教育システムというものを取り入れる、あるいはそれに対抗し得るような新たな教育の方法を構築していかないと、これからの世界の中で日本の東方学の研究者が、欧米、あるいは中国本土の研究者と対等に渡り合っていけなくなっていくのではないかと思います。

以前はアメリカの中国研究者はほとんど日本に来て、日本の文献が読めて、日本語が話せるという状況でありましたけれども、最近では日本には来ない。全部中国に行ってしまうと、日本語はもちろんしゃべれませんし、日本語の文献も読めないという欧米の研究者が大変増えております。それは研究所に来る研究員なんかの数を見ても、最近そういう傾向が非常に顕著になってきているように私自身は思います。

このような状況認識のもとで、これから中国研究者をどういうふうに再生産していくか、あるいは教育していくかということ、これは教養教育の段階までさかのぼって、さらに言えば中、高での古典教育の問題までさかのぼって、社会全体で考えていく必要がある問題であるように思います。

大変雑駁なまとめでありますけれども、3回のシンポジウムを通して、これからの21世紀の新しい東方学を目指して、我々、一丸となって努力していく必要があるのではないかと、いうふうに自覚を新たにいたしました。

それでは、最後に所長のほうから一言ごあいさつをお願いします。

閉会の辞

阪上 本日はどうもありがとうございました。4人の先生方からは大変興味深く、また、内容の濃い報告をいただき、それをコメンテーターの方が深めていただいて、大変有意義であったと思います。また、フロアからもいくつか重要な問題の指摘がありました。

きょうのご議論を聞いておりました、東方学の再構築のためのいくつかのモーメントといますか、契機が見つけれられたように思います。1つは、東方学を考える場合に、普遍的なものと特殊なものをどのように関係づけるかという問題です。中国はたしかに個性的な文化、文明をもつ国でありますけれども、それを単にヨーロッパと異なるものとするのではなくて、共通性、あるいは普遍性を含めながら世界の中で考えるという、そのことの重要性です。金先生をはじめ何人かの先生がご指摘なさったと思うんです。

もう1つは、官と民ということで、これは濱下先生もおっしゃったし、武田さんのご報告にもあったように思います。どうしても官の思想、あるいは官の制度のほうが見えやすいものですから、われわれはそこに重点を置いて理解しがちですが、そうするといかにもまとまった形で、中国的なものが定義できるように思われます。しかし民のレベルで考えると、必ずしもそうではない。そのレベルに広げて考えることで、従来の東方学とは異なった、濱下先生のお言葉を借りれば、グローバル・ヒストリーの足がかりのようなものが見えてくるのかなと思います。

そういう点で考えると、東方学も以前の東洋と西洋というふうな固定的な枠組みを超えて、新しい普遍をもとにした学問として打ち立てていく必要があるだろうと思います。それは単に東方学にかかわることだけではなくて、むしろ人文学全体について言うことであろうと思います。きょうのお話は東方学にかかわるものでありましたけれども、より広く考えると、人文学全体の変革と言いますか、21世紀の人文学がいかにあるべきかという問題におよぶところが非常にたくさんある。少なくとも私はそういう問題提起と受け取りました。

本日は、長時間、報告とご議論にご参加いただきましてありがとうございました。シンポジウムはこれで終わりなんですけれども、これを始まりとして、今後いろいろ人文学の問題、東方学の問題を考えていく機会にしたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」

第3回「東方学の再構築」

2002年3月25日 印刷

2002年3月31日 発行

発行所 京都大学人文科学研究所
京都市左京区吉田牛ノ宮町
〒606-8501 TEL 075-753-6902

印刷所 共同印刷工業株式会社
京都市右京区西院久田町78番地